

更に命ものびぬべし。

これがその詩の今様の一つだ。

### 八 生野銀山の義軍

文久三年に、廟議が一變して、例の三條卿を初め七卿の方々が長州に落ちられることとなつた。

そこで宮廷内における勤皇派の勢力といふものが火の消えたやうになつてしまつた。

平野は七卿の爲めに、大いに冤を訴へたが、佐幕派の勢力がズツと伸び出した折であるから顧みられやう筈もなかつたのだ。

その中に同志の義徒も段々身邊が危うくなるものだからボツ／＼と解散してしまふ。やがて國臣自身も従僕熊藏といふ者と、阿波の同志で長曾我部太七郎と三人で、一まづ京都を退ぞくことになつた。

平野等は但馬路に落ちて、豊岡の士、太田正道といふ人の許に、暫らくその身を落ちつけ

自分は佐々木將監と改稱して、暗に義徒を募つてゐたものだ。

元來この但馬といふところは勤皇の地で、平野がこゝに目をつけて逃げて來たのも、實は同志の士があつたからだ。御一新の當時、伏見鳥羽の戦争が甘く行かなかつた場合には、主上の鳳輦を、先づこの但馬路に移し奉つるといふ、官軍側の作戦であつたところを見ても、この但馬の地がどんなところであるかと察せられる。

一方では大和の十津川の郷士が大いに興らうといふ計劃があつたので、平野はそれと相應じて生野銀山に兵を擧げ、大和の勤皇軍と歩調をそろへて京都に侵入し、君側の姦を打ち拂はふといふ企てであつた。

そこで平野は三田尻までやつて來て、七卿の一人の何人でもよいから是非とも脱走して銀山の義舉に加はつて貰ひたいと相談に出掛けたものだ。

何でも三條さん達は不賛成であつたらしい。準備があまり粗末であるところから、そんな風に考へられたのかも知れぬ。何しろ銀山の擧兵といふものは鐵砲が十五六挺に、槍が三十本ばかりも用意してあつたに過ぎないといふ話だ。

これで徳川幕府を征伐して、天皇親政の大御代に返へさうといふのだから、随分無鐵砲な話には違ひない。

しかしそこが情熱家の平野だ。鐵砲の十五六挺でもつて、眞に幕府を倒し得るものと信じて疑はなかつた。

七卿の一人澤主水正宣嘉卿が平野に同意されて、夜陰に乗じて三田尻を脱走して、播州路へ向つたものだ。

長州奇兵隊の總督をしてゐた河上彌市といふ人がある。この人が手下の壯士三四十人を率ゐて、平野に同行した。

恰度一行が播州に來た時に、大和十津川の方が敗れたといふことを聞いたので、平野もこれには失望したが、もうかうなつては乗りかゝつた船だからこゝで止める譯には行かない。

直ぐさま但馬に入つて、私かに同志の勢揃ひをやつたところが、集まるもの三四百人であつたといふ話だ。

意氣冲天の勢を以つて、生野銀山の代官川上猪太郎を襲撃したので幕府は、出石、姫路

龍野、豊岡の各藩に命じて討伐せしめたため、一溜りもなく敗軍に及んでしまつたのだ。

### 九 君臣は天地の公道

「飛んで火に入る夏の虫」

といふのは、全く當時の義舉を評するに適合した諺だが、そんなことは、後から見る人がいふ言葉で、當時の志士の心中といふものは、身を擲つての大仕事であつたのだ。

平野が決死訣別の書を、福岡なる父老同志に寄せたものがあるが、あれを見ると、平野の意氣の旺んることが分かる。

この手紙の文言は、嘗て拙者が立雲翁から聞いたことがある。本文は見ないから分らぬが立雲翁の記憶のまゝに語られた文句は、正に次の如くだ。

各君御壯健奉賀候、天下ノ形勢、定メテ御承知被成ベク、如何御因循被成候ヤ、臣下ノ忍ブ所ニテハ御座アルマジク候、君臣ハ天地ノ公道、主従ハ後世ノ私事カト、發明仕候、天朝立チテ各藩立チ、神州アリテ各國アリ。何ゾ其末ニ泥ンデ、其基本ヲ助ケザランヤ。六

親背キテ大孝現ハレ、大道廢レテ仁義アルモノニ御座候。今日ノ急務ハ〇ノ一字ニアリ鬼神モ之ヲ避クルト云ハズヤ。區々トシテ朱斗ノ小計ヲ爲スハ小人ナリ。愚俗ナリ。謹デ豪傑ノ實行ヲ見給フベシ、不日ニ一軍ノ兵勢ヲ舉動シ、天下ノ耳目ヲ驚カシテ貴覽ニ入ルベク候、能ク目ヲ拭ヒ、耳ヲ洗ヒテ、十五日ヲ待チ給へ。再會期シ難シ。勿々頓首。

立雲翁はこの文句を暗んじてゐて、

「俺は本文を見たことはない。たと聞き覚えてゐるのだから。間違ひだらけだらう」といつてゐるが、聞き覚えで、これを五十年も六十年も覚えてゐるのは、大した記憶力だ。

文中の語氣から察すると、平野は福岡の同志といふものを大分見くびつてゐるやうだ。

「君臣ハ天地ノ公道、主従ハ後世ノ私事」

と喝破したところは、卓絶した識見だ。今日から見れば何でもないことではあるが、當時の日本では、天子様の存在を知らないものが多かつたのだ。

主従といふのは、殿様と家來との間をいふのだが、それが今一段上つて見たところで、將軍と殿様との關係だ。

そこへもつて来て、天皇の下に直に臣民があり、この臣民たるにおいては、將軍も殿様も家來も同一だとの考へは、當時においては、トテモ異端邪説であつたに違ひない。

「今日ノ急務ハ〇ノ一字ニアリ」

といふ、〇は金のことだと早合點してはならぬ。

これはいはずと知れた断といふ一字のことだ。その後

「鬼神モ之レヲ避ク」

となくつたつてチャンと分つてゐる。

どうも福岡藩士が、因循姑息な考へばかりしてゐて、トント煮え切らないのを憤慨してゐる口吻が見えてゐる。

「謹ンデ豪傑ノ實行ヲ見給フベシ」

とは、随分人を莫迦にしてゐる。

兎も角、鐵砲十五挺ぐらゐで東照公以來の徳川氏に一撃を加へようといふ豪傑だから、その意氣の旺んなことは、察するに足る。

## 十 流石に一軍の將

平野と一緒に生野に出掛けた筑前の同志の中には、藤四郎茂親を初め、その他三三人あつたさうだ。

この藤四郎の實話といふものを、古老の一人から嘗て聞いたことがある。

その述懐談によると、平野は銀山義軍の總大將といふ格であつて、但馬の養父郡妙見山といふ山に立て籠つて、大いに防戦したものだ、とても衆寡敵するわけのものではない。

その中に味方は敗軍となる、平野は腰に鐵砲の彈が當つて負傷をしたのだ。そこで一軍は總くづれとなつたので、平野も辛うじて山を下つた。

その時藤と平野と二人で逃げ出したものだが、平野はきらびやかな大將のいでたちをしてをり、藤も甲冑をつけてゐるので、このまゝ落ちて行つたのでは、直ぐに捕まつてしまふことは明白だ。

そこで藤が平野にいふには、

「オイ平野、戦争に負けて見れば、仕方がない一先づ此の場を逃げて、必度再興をはからんければならぬ。死は易く生は難しだ。お互の命は大切な命だから、何とかして逃けさせる工夫をせざるまい。それにはお互ひに、こんな風をしてゐては駄目だから、衣装をすて、百姓の姿になつて落ちやうぢやないか……」

といつた。すると平野は之れに反對だ。

「拙者は苟くも官軍の大將だ。その大將が、百姓の姿になつて捕まつたとあつては、後世に面目が立たない。同じ捕るにしても、堂々と大將の姿で捕まりたいものだ。でなければ武夫たるものゝ顔が立たぬ」

と凄まじい勢ひだ。

藤は藤で、

「ソナナ小供見たやうなことをいふもんぢやないよ。そんな姿で逃げ出せば、まるで捕まりに行くやうなものだ。百姓になれ〜」  
といふがどうしても聞かぬ。

これは但馬の人から聞いた話だが、流石は勤皇の大志ある平野國臣である。心の正しいこ  
と以つて見るべしだ。

「乃公はどこまでも大將で行くぞ」

といふ、藤は仕方がないから

「それぢや君は大將で行き玉へ、俺はこれから百姓になる」

といつて、鎧を抜いでしまつて、百姓の姿になつて逃げて行つてもものだ。お蔭で藤は無事に  
筑前に返へつて行つた。

平野はどこまでも自説をまげず、堂々たる大將の姿で田圃路を落ちたものだ。

案の定、朝來郡の網場村といふところまで来て、その舟の中で、とう／＼豊岡藩士の爲  
めに捕へられてしまつた。

捕へられても平野はどこまでも大將の威容をかへなかつたといふ、こゝが平野の平野たる  
面目の存するところだ。

平野が豊岡の獄に座した時には、大小用を足す時か何かの外は、決して座を立たず、東天  
に向つて正座してゐたものだといふが、後に平野が京都に移された跡を見たところが、平野  
の座してゐた場所丈、疊がボコンと凹んでしまつてゐたさうだ。

眞木和泉

一 神官から出た勸皇家

「衣食足つて禮節を知る」といふ言葉があるが、成るほどその通りに違ひない。

九尺二間の裏店のお神サンの中に、亭主の稼ぎ出るのを送つて、

「デワお出掛けあそばせ」

なんて、中指で疊をつくやうな真似をする者は一人もあるまい、もしも假りにそんなことがあつたとしたならば、

「此のアマ、巫山戯やがるねエ……」

糞食らへで出て行くであらう。

とはいふものゝ、此のお神サンだつて、亭主だつて、矢張り一人前の人間だ。

「馬子にも衣装」

といふ諺のある通り、チャンとした洋装でもさして、文化住宅かなんかに棲まはせると、その中には段々上品になつて来る。後には嬪——イヤ奥様の手を脇の下にかゝへ込んで、銀

ブラなんかをやるやうになるかも知れない。

「氏より育ち」ともいひ、「水は方圓の器に随ふ」とも申し上げて、何にしても品よく育てば、品よくなるのは當り前だ。

そこで「衣食足つて禮節を知る」といふことになるのだが、そこは凡人の悲しさで、禮節を知るやうになると勇氣といふものが段々消えて行くのだ。

これは致し方のないもので。金持や貴族の息子に蠻力を有するものが少ないのは世間の通例だ。

そこで衣食が足れば、禮節が備はつて来るには違ひないが、禮節が備はつて来ると、又従がつて蠻勇がなくなつて来るといふものだ。

一旦緩急あれば義勇公に奉ずといふときに、役に立つのは、矢張り貧乏人の若いのだ。そこになると禮節階級の若様なんていふ代物は尻の突つぱりにもならぬ。

徳川の封建政治といふものが二百何十年と續くと、そこに階級がチャンとついて、馬鹿息子子でも長男ならば家督相続、家老にもなれば、數百石の侍にもなれる。

どうもかういふ風になつて来ると、禮節階級が墮落してしまつて、眞倒の時に役に立たぬ。幕末維新にかけて、サア天下の大騒動が持ち上つて来ると、大身者の倅なんといふのは、どうも役に立つてゐないやうだ。

大凡そ當年の志士とか、浪士とかいつて、諸方に崛起した人傑は、大てい貧乏侍の子で、次男坊か三男坊で、禮節階級でない方の先生だ。

維新の三傑といはれる、西郷、大久保、木戸にしたところで、とても微祿の士だ。月照なんかは坊主から起り、蓮月は尼僧から奮ひ、眞木和泉守は神官から憤起するといふやうな譯で大身者からは、あまり香ばしいのが出てゐない。

その微祿者の一人、神官で平生ならば高天原に神とよまりと、拂ひ玉へ清め玉へをやつてゐるべき一人に、我が和泉守眞木保臣がある。

此の人は平野二郎や、久坂玄瑞なんぞと、勤皇の運動をやつた人だが、九州は筑後の國、久留米の水天宮の神官から、あれほど頭角を現はすには、何か變つたところがなくてはならぬ。



## 二 楠公の崇拜家

今では琵琶歌となつて、四弦に和して歌はれてゐる、あの有名な石堂丸和讃にある、

「筑前筑後肥前大隅薩摩で六ヶ國」

とあるその中の一國筑後といふのは、一番小さい國だ。舊藩主は有馬氏で、筑前黒田氏の十五萬石に比すると、まるで話にもならぬ小藩だ。

しかし昔は菊池武光が最後の決戦をやつた筑後川の流るゝところで、武光が血刀を洗つたといふ太刀洗川なんぞもあり、なか／＼由緒のある土地だ。

それに筑後川の流域は、景勝の地に富んでゐて、眞木和泉の神官を勤めた、瀬の下水天宮なんぞは、水國の美をあつめたところである。

和泉守は水天宮祠官の家柄に生れたので、父は眞木旋臣といひ和泉守は幼時は鶴臣といつてゐるが、後に保臣といつたものだ。文化十年三月七日の生れだといふから、佐久間象山からいふと三歳の弟分だ。

和泉守の姉にこまといふ人があつた。この姉サンが、保臣の十三の時にお嫁に行つた。矢張り同藩の家老をしてゐた岸氏の家臣で宮原半左衛門といふ人に嫁したので。

この半左衛門といふ人は、どんな人であつたか知らぬが、此の人の親爺サンといふのは、宮原國綱といつて、相當の學者であつたらしい。國綱の著書に、「筑後民間孝子傳」なぞといふ書物もあるから、家柄が家柄だから、藏書が随分あつたものと見える。何でも十三四になつた保臣が、この姉さんの嫁入り先きに出掛けて行つて、此の家の書物は、大概讀みつくしたといはれてゐる。

保臣の家筋が家筋だから、自然神道から來た勤皇思想が、彼れの頭に沁み込んだものだから、俗に神道屋といふ、凝り固り屋ではなくて、學問が好きであつた丈に、廣く和漢の書を読んだものだから、さうした廣い見聞の上から、自然に忠孝の大本に立脚する勤皇論が養はれたものと見える。

眞木和泉は、楠公といふものにひどく魂を打ち込んでゐる、五月二十七日、この日は楠公湊川討死の日とされてゐるので、和泉は此の日は、どこに行つてゐても、屹度「楠公祭」を行

つたものだ。

「楠公を祭つるの文」といふのがあるが、漢文で書かれたものに嘉永七年と萬延元年の二稿がある。

嘉永七年の「祭楠公文」に

一維嘉永七年甲寅、夏五月二十有五日、平保臣逐在南部。竊奉清酌庶羞之奠。敬祭楠公の神靈……」

とあり、萬延元年の五月二十五日にも「祭楠公文」がある、これによつて見ると、いつごろから初めたものかは知らぬが、兎に角毎年々々、五月二十五日といふ日といふ日を忘れないで、楠公を祭つたものと見えるのだ。

いろ／＼楠公に感心もし、敬服もし、崇拜もする人はあるが五月二十五日に楠公祭を一人で行つた人は、恐らく眞木和泉守の外はあるまい。

「我れ世の不咸に遭ひ、子子斯に在り。禮を具へ儀を正しうする能はず。唯公之れを知る。尙くは饗けよ」

といつてゐる。誠忠の心、知るに足るものがある。

### 三 形は尊氏心は楠公

眞木の「楠公論」といふものがどんなところから来たものやらそんなことはトント御承知がないのだが、何やら楠公には縁が深いと見えて、元治元年の蛤御門の戦争の折に、この楠公論が出てゐる。

元治元年の戦争といふのは、前年長井の遊説の文句がたゞるやら何かで、長州が朝廷から譴責を蒙むることになつた。その冤を雪ぎたいといふのが、蛤御門の戦争となつたのだ。

長州側からは國司信濃なんぞの重臣連中をはじめ、久坂玄瑞だの、來島又兵衛なんといふ人傑が、兵を率ゐて京都に押し掛けて行つたものだ。

その折に眞木も勤皇派の一人殊には長州勤皇志士との關係から、その一軍の重だつた一人として加はつてゐたのだ。

元來、この時の東上といふものは、藩公が、罪をきせられ、勅諭を蒙つたといふのは、

全く君側の姦臣どもが、佐幕派の手先になつてやつたことだから、これは何としても、無實の罪を晴らさんければならぬ。

といふ考へから、少し威力を示すぐらゐのつもりで出掛けたのだから、戦争をする氣はとんとなかつたのだ。

久坂なんといふ人は、殊に非戦論を説いてゐた人だが、來島又兵衛と來ると、何か事あれかしと望んでゐる先生で、腕がウン／＼うなつてゐるといふ豪傑だから、チャン／＼バラバラをやりたくて仕様がな。

そこで、久坂が非戦論なんぞをやるのを聞くと。

「お前等が青表紙ばかり讀んでゐるから、そんな氣の弱いことをいふのぢやよ。腹の底は戦争がこわいのぢやらう……」

と怒鳴つてゐるものだが、久坂なんかは、そんな子供だましのやうなことには、耳も傾けなかつた。

しかし勢ひといふものは致し方のないもので、此方が兵隊をつれて乗り込んで來ると、幕

府側でも兵隊を以つて、之れに備へる。ブツ／＼頭の上から煙の上つてゐる連中が、兩方に對陣して見ると、どうしても一せり合ひやらんければ、纏まりがつかない。

いよく形勢が危くなつて來た時に、長州軍の主腦者連が集まつて一大評定をやつたことがある。その時に出したのが楠公論だ。眞木がいふには、

「お説の通り、こちらから戦争をしかければ、どうしても宮闕に向つて發砲したといふことになつて、朝敵の汚名を受けるかも知らんが、これはこちらが逆境に立つてゐるのぢやから致し方がない、我輩は、形は足利尊氏でも、心が楠正成であれば、少しも差支はないと存ずる」

とやつたものだ。

それでも久坂丈けばどこまでもそれに反對で、如何なることがあつても、こちらから手を出してはならぬといつてゐるさうだが、どうやら、眞木の「形は足利、心は楠公」論が勝つて、ズドン／＼とやり出してしまつたのだ。

そこは、眞木も誠忠の士ではあるが、久坂ほどの經綸がないから致し方がないので、とう

とう天王山か何かで一敗地にまみれてしまった。

#### 四「昔者物語」

時代の變るといふものは、ヒドいものである。天下をとつたり、とられたりするやうな事はいつの世にあつても同じことだが、社會生活の状態といふものは、こまかい事に、大した變化のあるものだ。

それについての一つの話題があるのだが、眞木の書いた、昔者物語の中に、次のやうなところのあるのを、覚えてゐる。それはかうだ。

「ある老人の話にこんなことをいつてゐる。それは昔は田圃に出て女が働いてゐるといふ姿を見ることは稀れであつた。大が野良仕事をしてゐるものは男ときまつたもので、女は家の中で仕事をしてゐるものだ。ところがこのごろはなかくどう致しまして、女が盛んに野良に出て仕事をするやうになつた。これはまことに困つたものだ」と嘆息した話が、載つてゐる事だ。これは一寸聞くと可笑しな話だ。

野良に出て働らくのが、以前は男ばかりであつた。ところが女もこの頃では野良に出て働らくやうになつたといへば、先づもつて、

「結構な世の中になつた」

と喜びさうなものなのに、それとは反對に、

「これは困つたことが出来たものだ」

と嘆いてゐるのは、どうしても受けとれぬ話だ。ところが眞木の書いてゐるところによるとそこに次のやうな感想が述べられてゐる。マア氣を落つけて聞いて見玉へ。

「なぜ困つたかといふと、女といふものは、家にゐて手織の機を織るのが唯一の仕事で、これが一家の主婦といふものにとつての最大の仕事で、一家中の人々の衣服は、みんな自分の手でやつたものだ。だから野良なんかに出る暇がなかつたのだ。ところが近年は、女が野良へ出て仕事をする方が金が餘計にとれるといふやうなところから、野良に出て働らくものが多くなつた。この爲に二つの大きな弊害が出来た」といふのだ。その二つの弊害といふものは何かといふと、

「一つは女が金を出して、呉服店から反物を買ふやうになつた。その爲に衣服が一たいに華美になり、キャシヤになり贅澤になつた。これは嘆ずべきことだ。それから今一つの弊害は、女が野良に出て夫と一緒に仕事をするやうになつてから、一體に男の働らきが鈍つた」

といふのだ。ツマリ女子労働の結果は、

- 一、家庭生活の華美
- 一、男子能力の低下

といふことだ。

この論が當つてゐるかどうかは、閑人は社會學者でも、また經濟學者でもないから、トント相分り申さぬ次第だが、何やら面白い觀察ではないか。

眞木が書いたのは、何時のことかは知らぬが、先づ弘化から安政ごろの事だとすると、今からまだ百年とたゝないころの見聞だ。

そのころに婦人労働を否定してゐるのに、今日では野良に仕事どころか、大半は男の仕事

を女がやるやうになつてゐる。して見ると、現代は殿方の御能率といふものが、どんなに低下し玉つてゐるか、ソロバンに掛けて見るのも面白い。

### 五 十一年間の幽囚

封建政治の社會では、どこでもあり勝のことで、久留米藩でも世嗣問題で大獄を起したことがあつた。

これは世襲といふ制度が生む必然の結果だ。

小身者の上にも、大身者の家でも、長男は家督相続と、チャンと決まつてゐる。そこへ妾腹の子が出来て、家督を争ふといふやうなことは、ザラにあつたものだ。

小身者の上ならば、これもさしては問題にならぬが、一國の藩主、御殿様のお世嗣となるところが直ちに一藩の運命に關する。

鹿児島のお由良騒動だの、黒田騒動だの、皆んなこの世嗣のごたくから出来たものだ。久留米で起つた世嗣問題は、これらとは少し趣きを異にしてゐる。當主有馬頼永公——此

の人は弘化元年の五月に有馬頼徳公が参勤の途上で歿したので、その後を嗣いで立つた人だ  
—の死を豫想して、あらかじめその後を策しようといふところから、家臣の間に問題を生  
じた。

順位からいへば、

有馬孝五郎（長公子）

有馬富之丞（次公子）

だから孝五郎に家督を継がしむるが當然だ。ところが参政村上守太郎、不破彌市、野崎平八  
郎なんぞといふ面々が謀議を凝らし、先づ最初は孝五郎を立て、嗣とし、後には富之丞の  
成長を待つて之れを擁立しようといふ運動を起したのだ。

この村上といふ参政は、嘉永三年に江戸の藩邸で、馬淵参政に刃傷に及び、藩老有馬飛弾  
の爲めに殺されてしまつたが、これなぞも、村上異心の成就を欲するところから、こんなこ  
とになつたものらしい。

そこで眞木和泉は、これは藩の一大事である。このまゝに放任して置いたら、山々しき大

事となると思つたから、彼れは衆に率先して藩政の大改革を企てたものだ。

それは村上黨であるともいふべき、

有馬河内（執政）

有馬豊前（参政）

不破彌市（同）

なんぞを斥けて、それに代るに同志中の稻次因幡を擧げて執政として、馬淵貢や、水野丹後  
や木村三郎なんぞといふ、誠忠の士を参政に進めようとするのが、眞木の改革意見であつた  
のだ。

一方には藩政の改革をするのではあつたが、その一方では、孝五郎公子、即ち當主有馬慶  
頼の地位を擁護するにあつたのは申すまでもないことだ。

嘉永五年に此の事が暴露してしまつたので、執政有馬河内が大獄を起して、眞木を初め、  
諸有志を悉く獄に投じたものだ。

眞木が幽囚に逢つたのは、随分長い間で、嘉永五年から文久二年まで、十一年間も暗い日

を見てゐたのだ。  
眞木の年齢からいへば、四十歳から五十歳までの間で、思慮の最も富んだ。働らき盛りのころであつた。野に放つて置いたら、随分仕事をしてゐたであらうが、惜しいことをしたものだ。

### 六 非常時對策

非常の時には非常のことを行はなければならぬ。それでなければ人心を新らたにするには足らぬといふのが眞木の考へだ。

彼れが藩政について建言した文書の中に秘策と題する一篇がある。  
その文書の劈頭において、眞木はこの理を喝破してゐる。

「非常のことを不爲ば、非常の功なしといへることあり。成程、なみのことをして、常なみよりもぬけたる效を得んと思ふは、無理の極と云ふべし。扱當時に於て、非常と思ふことは、古へにては、常なみの事なり。古の聖代にも、挽回せんと思ふならば、古の常なみ

の事だけを行ふにあらざれば不能なり、凡そ仁政と云ふものは、民の産を均くし、各々其の産によりて恒の心あらしめ、平生は節儉して、衣食住、共に至極質朴に、飢饉は勿論、いかなる變にても、不動様に備を立てしむの様のことを、專一にすることなれば、富者、游民等は、不好ことにて、一々上の仕向を難有とは思はぬものなり。然れば人君宰相と能く心を合せ、議論一定して、數十年一筋に押逼り、少々の礙りありとも、少しもひるむまじきなり……」

といつてゐる。

「普通のことをしておつては決して人心が動くものではない。そこで昔から明君賢主ともいはるゝ人は、必ず常に變つたことのあるときに、ヒタ／＼と手をつけてゐる」といふのが眞木の論鋒だ。

そこで今はどんな時かといふと、とても非常の時だといふのだ。  
外には洋夷の禍があり、内には朝幕の争ひがあり、日本にとつては、このくらゐ非常の時はないといふので、眞木が眞向から非常策を論じてゐる。

眞木の建策といふものは、いろ／＼あるが、どれを讀んでも感心することは、理論ばかりではないことだ。

藩政の改革をいへば、殿様や後臺所、調度や膳部から論じて、國防、財政、教育、社會生活、官吏の勤め向、儀式の變改、農工商のやり方、社寺から村祭りのことまで、一々事實をあけて論じてゐる。

かういふところから見ると、眞木といふ人は、立派な政治家であつた。

當時の勤皇家といふと、たゞ忠君一天張りで、詩でも吟じてゐるのが關の山といふところが多かつたのだが、眞木は細かい事なら、馬小屋の建て方から、畑の虫の取り方まで指導の出来る實際政治家であつた。

「芝居といふものは人民の好むものだから、年に二度、春秋ぐらゐにやらしてもよい。舞臺の側に、棒を五本ばかり立て、置いて、若し場内で喧嘩口論をしたり、不行儀をしたり高聲をあげたりした者があつたら、容赦なく引きずり出してその棒にくくりつけて置く」などといふのは、却々面白い。これは今日行つても決して悪くはない。芝居ばかりでなく、

議會なんぞでも應用したら、頗ぶる結構だらう。

### 七 白晝公然と脱走

人間一生の中で、一番油の乗つたといふ四十から五十までの間、この間を棒にふつた眞木和泉は、元治元年五十二歳で死んでゐるから、眞木がほんとうに國事に奔走したのは、最後の二年間に過ぎない。

眞木の四十から五十といふと嘉永の末から、安政、萬延、文久といふ、幕末の活舞臺だ。此の間に若し眞木が自由に中央に活動してゐたら、確かに彼れの事業は、今少し天下を動かすものとなつてゐるに相違ない。どうもこゝになると天運といふもので致し方がない。

「運は天に在り牡丹餅は棚にあり」

とかいつて、牡丹餅と運とを一緒にして、手を出せば取れるものゝやうに云ふものもあるがチャンスといふものなら別のこと、天運となると、人間の力では如何ともすることが出来ない。



文久二年、眞木が幽居「山樞窩」にこもつてから十一年目ごろに、眞木の周囲がボツ／＼動き出した。

長州の毛利敬親が中央に乗り出すのに對して、一方では薩州の島津久光が公武合體の大運動をやるといふ。

此の氣勢に乗じて天下の志士が何やら一仕事をしようといふので、あちらからも、こちらからも、筭のやうに、ムク／＼と起き上つて、それが東西南北に奔走を初めたものだ。

九州では筑前の平野國臣や、豊後の小河一敏なんぞが、九州一圓の勤皇の士を結合して、各藩連合の大勢力を作つて、勤皇の旗を建てやうといふので奔走し出した。

長州では久坂玄瑞、京都では田中河内介、これらの人々が、それと東西相應じて策動したのだが、眞木は九州勤皇家の重鎮とも推されてゐる人物だから、かうなれば世間がジツ／＼とおかない。

平野、小河は勿論のこと、諸方の有志が、ドシ／＼山樞窩に密行して、議をこらすやうになつたので、眞木も遂に大勢に動かされて、脱藩するに至つたのだ。文久二年二月の十六日

のことだ。

この眞木の脱藩のしかたが面白い。

かう天下が騒々しくなつて來ると、久留米藩でも眞木の身邊が可怪しいぐらゐの氣はついてゐるので、密かにその動靜をうかゞわせてゐたものだ。

すると二月の十四日、和泉の弟で理兵衛といふのが、矢張り義舉を起さうといふので、脱走したものだ。その時は何でも小供の菅吉と姪の宮崎榎太郎といふのを伴つて出たものさうだ。

さうすると一層和泉の身邊が嚴重に見まられる。そこで和泉が考へるには、

「これは夜なんか密かに逃げ出したのでは、却つて危いから、一層の事、晝間堂々と逃げ出した方が安全だ」

といふところから、十六日の晝白日の下に、淵上謙三、吉武助左衛門などを従へて、堂々と繰り出したものである。

果せるかな、かういふ風にして逃げられたのでは、却つて手がつけれなかつたと見えて

警戒してゐた藩の捕吏も、どうすることも出来ず、たと指をくわへて見てゐる計りだつた。

### 八 天王山の最期

脱藩して罪をゆるされるといふのも珍らしい話だが、脱藩の翌年文久三年の二月四日、眞木を初め、亡命の士が皆んな許されることになつたので、眞木は天下晴れての行動が出来るやうになつたのだ。

何處の藩にもあることで、勤皇、佐幕の對陣は久留米藩でもあつたのだ。眞木等の運動があまりに勢を得て來たので、佐幕派が静まつて居らぬ。殊に執政有馬監物が佐幕派の棟梁であるから、勢力を持つてゐる。

眞木は一徹の人だから、藩主に面謁して、藩政の大改革を言上した。そして尊王攘夷主義でやらなければならぬ。それには嘉永の獄で幽囚せられた、勤皇派の參政水野丹後、木村三郎を登用して、執政有馬監物を斥けられたいと、大いに彈劾を試みたので、又もや監物の爲に獄に投ぜらるゝの身となつてしまつたのだ。

今度の投獄は、ごく短かくて翌五月十七日になつて一同許されるに至つた。それから元治元年の蛤御門の戦争となるまで、眞木の勤皇運動は最高潮に達してゐる。元治元年の七月二十一日、天王山で自刃した時に、眞木和泉をはじめ同志の士が十六人あつた。

- 池尻茂四郎(久留米)
- 松浦八郎(同)
- 加藤常吉(同)
- 千屋菊次郎(土佐)
- 松山深藏(同)
- 能勢達太郎(同)
- 安藤眞之助(同)
- 小坂小次郎(肥後)
- 加屋四郎(同)

中津彦太郎 (同)

酒井莊之助 (同)

宮部春藏 (同)

西島龜太郎 (同)

松田五六郎 (筑前)

岸上弘 (上毛)

廣田精一 (同)

であつた。今でも山崎に行つて天王山に登ると、眞木等の碑が立つてゐる。  
その時の眞木の辭世の歌に、

大山の峰の岩根に埋めけり

我が年月の大和魂

何となく高朗の調のあるところは、争はれぬものだ。

文久三年に、郷國を出る時には、眞木は心ひそかに生還を期してはるなかつたものだ。

年月つれ添ふ最愛の妻に別るゝとき、

葛の葉のうらみてもなほ歸へれども

かへらぬ袖に秋風ぞ吹く

といひ、また

かたちこそ手弱女ならめますらをに

かはりて國の事思はなむ

とも詠じてゐる。

友人木村三郎に示した詩に、こんなのがある。

一朝忽被奸人忌。

天下既無容足地。

數畝山國猶可求。

如何聖主中興事。

これは多分元治元年の作であらう。

いづれにしても自分の爲めにする考へは少しもなく、唯だ君國の爲めに一身を捨て切つてしまつてゐるのだから、その心境といふものは、秋の空のやうに澄み渡つたものだ。

九百敗一成

「經新愚説」といふ、眞木の時務策論がある。これは萬延二年、即ち文久元年に、野宮定功卿に建白したものだといふが、その中の要説は、

- 一、宇内一定を期すること。
- 一、創業の御心得のこと。
- 一、徳を修むること。
- 一、經筵のこと。
- 一、紀綱を嚴にすること。
- 一、賞罰を明らかにすること。
- 一、親征のこと。

- 一、百敗一成のこと。
- 一、言路を開くこと。
- 一、舊弊を破ること。
- 一、封建の名を正すこと。
- 一、古來忠臣義士表稱のこと。
- 一、九等の爵位を修むること。
- 一、文武一途其名を正すこと。
- 一、勳位を復すること。
- 一、服章を正すこと。
- 一、文武大學校を建て天下の人才を網羅すること。
- 一、伊勢尾張の神器御扱方のこと。
- 一、親衛兵を置くこと。
- 一、僧を兵とし寺院を衛所とすること。

一、兵器を改造すること。

一、古訓師を學校に置き舶來品に命名すること。

一、財貨を公けにすること。

一、邦畿を定むること。

一、帝都並に離宮を定むること。

一、租賦を軽くすること。

一、官制を改むること。

を擧げて、一夕説明を加へてゐるが、これ丈の條項を列擧しただけでも、眞木が如何に經世家的な頭腦をもつて居つたかよわかる。

この中で「百敗一成」の意見などは、別に新しいことでもないが、一體物事といふものは、人の思つてゐるやうに、トン／＼拍子に出来上つて行くものではない。その間には、いろんな困難があり、その困難を乗り切つて、やつとの事で目的地に達することが出来るものだといつて、王政復古なんか、大義を天下に布く、立派な仕事であればあるほど、それに

伴ふ困難も多いのだから、ウンと腰に力を入れてかゝらんければならぬといつてゐるのは、兎も角素人ぢやない。玄人の言だ。

眞木曰く

「創業の主の事を起す始め、死ぬばかり憂き目を見ぬはなし。固より征戦は、死生の地にて、疊の上の議論と異なれば事に臨みて意外の難儀もおこるは、當然のことと知るべし。然れども、極意の業に心志を靜かに定めて、大事に行き當りても阻喪することなく、氣長く謀るべきことなり……」

この邊の議論になると、まことに忠誠なものだ。

何事でも若氣の至りで、始めから成功するものゝやうに考へて仕事を始めるものは、一二ヶ月もすると「儲からん」なんぞと、すぐに悲鳴をあける組だ。

何でも先づ十年サ。「十年一昔」といふが、その一昔たゝんければ仕事の値打ちは出るものではない。

乃公は人に遣はれるやうな人間ぢやないよといつて、直ぐに上役に抗言して出てしまふ豪

傑もあるが、こんな先生に向つて仕事をさせると、何一つ碌なことはせぬ。  
まア、眞木の「百敗一成」を天井にブラ下けて、朝から晩まで、眺めてゐたら、何ぞ得るところがあらう。

### 十暮春の雨

和泉の學問は、神學が基を爲してゐるには相違ないが、學問としての大成は國文學よりも漢學だといはれてゐる。

しかし眞木の書いた國文の書を読むと、なか／＼達意に書きこなしてある。  
殊に文學としての著述もいろ／＼あるが、面白いのがある。その中で「暮春雨」と題するのがあるから、その全文を左に録して彼れの風流味を偲ぶの料としよう。

#### 暮春雨

雨も折からは、いとおかしきものなるを、春の今日あすとなりて、さらでも打ちながめらるゝ折から、つれ／＼と降り出でたるは、たへがたうわびしきものになん。花のなご

りに、そこはかたなく、かすめる空も、おぼつかなくかきくもりて、庭の木立、若葉のおひそふなかにも、梅などは、實もやう／＼ふとりてたわめるが、軒端にさしかゝりてはやう暮れければ、とうろうかゝけさせて、書よまんとするに、から／＼とけいしの音のするを、誰れならんと見るに外さまに物するなりけり。心へだてぬ友どちしめやかに物語りだにせば、うさも忘れまじと、文かきてやるに、下人のくるしうおもはんことさへわびし。

どこまでも寫實を主とし、實感の上に立つて書いてゐるのが、まことに面白い。机の上のつくりごとをしないのが、矢張り筆先の文學者でないからであらう。

眞木の「南僊雜稿」といふのは、彼れが水田の幽居にゐた折の詩歌集であるが、その中心をとめらるゝものを二三あけて見よう。

「哀哉歌十首」の詩があるが、その中に曰く、

有客有客名保臣。

以罪逐在華江濱。

四十鬢髮白數丈。

骨長膚黑眼光曠。

一脈曾溯洙泗水。

察知被世喚奸人。

嗚呼哀哉淚輒下。

陰雨此時入暮夜。

幽居の裡に座して母を懷ふの詩には、

有母辭離在紫灘。

幸聞即今身體安。

哀哀父今棄我早。

母也鞠我實艱難。

殊恩未報反勞劬。

中夜懷之心膽寒。

嗚呼哀哉肌生粟。

暮蟬此時聲斷續。

と詠じてゐる。早く父に別れて母の手一つで育てられた真木和泉が、獄中第一に心に浮べ  
来るものは、その母の老ひたる白髪の姿であつたのだ。

は、そはの露をいかにと思ひやる

袂にかゝる夜半の雨哉

どこからどう讀んでも、親を思ふ子の歌、子を思ふ親の歌ほど美はしいものはない。歌の  
よしあしなんぞをいふのは、商賈人の歌人にまかせておけばそれでよい。

幽居中の作であらうと思はるゝ「今様」の一首に、

身はあさ顔の葉がくれて

ひかさまばゆく成りにけり

晝も袂の白露は

ところせままでおき迷ふ

武市瑞山

歌の心は言葉の上にはない。底を掬んで清水の味ひを知る人であつて、始めて古への英雄を語ることが出来よう。



一 土佐勤皇の棟梁

維新の人々を挙げ來つて、土佐の國に及ばず、何よりも先づ第一に瑞山武市半平太を説かなければなるまい。

武市を抜きにして土佐勤王志士を語るのは、頭を抜きにして手足だけで踊つてゐるやうなものだ。

土佐の志士といふと、第一に坂本龍馬、中岡慎太郎をあげ、次いで後藤象二郎、板垣退助をあげる順序だが、その奥にはまだく本尊様が控へてゐる。それは武市瑞山だ。

當時土佐の藩政で聞えたのは吉田東洋で、武市は恰度この吉田と相對して、朝野兩黨の二大頭目であるの形があつた。

吉田も人物だ。佐幕派であらうが、守舊派であらうが、そんなことはトント吉田の人物を左右する議題とはならない。

第一彼れのやつた仕事を見ると、なか／＼素晴らしいことをしてゐる。その中でも學制を

立て、藩校文武館を造り、人物の養成に努めたなぞは後の土佐藩の有志を作り出したものになつてゐる。

それと恰度時を同じうして、荒野の末に卓然として身を挺して、高く勤皇の大義を倡出したものが武市瑞山だ。

文政十二年の生れで、慶應元年の五月に斷獄されて死ぬまで僅かに三十七歳の一生ではあるが、土佐勤皇にとつては、瑞山ほど、人心に大なる刺戟を與へたものはない。

瑞山は學問の方はそれほどではなかつたが、書畫ともに却々上手いものであつた。今にも遺つてゐる瑞山の筆を見ると、その畫などは立派なものだ。書も見事だ。

出で、勤皇の大義を熱叫しつゝも、退いては彩管を振つてゐた瑞山は、彼れも亦た一個の風流兒でもあつた。

瑞山の自畫像といふものはいろ／＼あるが、その中で宮内省の所藏となつてゐるものには、こんな題詩を讀してゐるのがある。

花依清香愛。

人以仁義榮。

幽囚何可恥。

只有赤心明。

僅かに數言の間に、彼れの心意氣を示して餘りがある。

又た獄囚裡に坐してゐる自分を描いて、

燕雀得時擅。

蒼鷹向暗眠。

如何幽獄裏。

慷慨只呼天。

と題してゐるものもある。昔は「燕雀焉ぞ知らん鴻鵠の志」

といつたものだが、いつの世でも、燕雀が天下を我物がほにサ、めき合つて、鴻鵠が時を得ないものと見える。

瑞山が「忠」といふ題で詠んだ歌に、

おろかにも我ものとは思ふべき

君の御楯と生れてし身を

といふのがある。

又たかういふ歌もある

櫻木に寫せば唐の言の葉も

大和心の花にぞありける

瑞山とばかりいふのではないが、大凡そ當年の志士の心情といふものは、その清きこと秋水の如く、蒼空のやうなものがあつた。

この頃のやうに、政治家といへば、賄路をとらない者はないやうなのは雲泥の相違だ。同じ日本の國だが、違へば違ふものだ。

## 二 親孝行の瑞山

瑞山は一介の劍客として成長してゐるが、その書といひ、殊に畫と來ては殆んど今日の專

門家も及ばぬ筆を揮うてゐるところを見ると、すべてに能才の人であつたらしい。

瑞山が劍道をはじめたのは十六歳の時で、高知で一刀流の師範をして居つた千頭傳四郎の門に入つて、一刀流を學び、それから、二十二の時に麻田勘七の門に入つて、翌年には中傳を授けられ、安政元年、二十六歳の折に免許皆傳といふ腕前になつて、自から道場を開いて師範したものだ。

だから諸君が譯のわからぬ屁理窟をつけて、愚圖々々いつてゐると、瑞山に抜き打ちに斬られてしまふ。尤も瑞山は六十年も前に死んでゐるから、今ごろ出て來る氣づかいもないが……。

それから瑞山は、劍道修業の爲めといふので、藩主から有難いお引き立てを蒙つて、二十八の時に江戸に上つて、桃井春藏の道場に入門し、翌年には門弟に推されて塾頭になつたのだから、その腕前の拔群であつたことはわかつてゐる。尤も塾頭なんぞになるぐらゐの人は、腕前も腕前だが、人を服する丈けの人望といふものがなくてはならぬ。

そこになると瑞山は天授の人品といふものを持つてゐたらしい。一度瑞山に逢ふと、犬や

猫までもなつき居つたものだといふ。

特に眼立つた學問をしたではなし、鬼神を驚ろかすやうな策略があるわけではなし、たゞ一介の劍術つかひであつて、土佐勤皇黨の巨頭と仰がるゝに至つたのは何かその人に具はつてゐる徳望がなくてはならない。

中岡慎太郎が西郷を評した言葉の中に、

「その誠實武市に似て……」

云々といつてゐるが、この誠實といふのが、武市の萬人に推服せられた所以だ。

尤も誠實なしで人に推服された人間はあまりない。

瑞山は大さうな親孝行で、嘉永二年に兩親共に一時に亡つた時なんぞは、實に孝養至らざるなきありさまで、評判の孝行者であつたといふが、さうでなくてはかなはぬことだ。

大凡そ親を粗末にする人間は碌でもない人間だ。

此の節の若い衆は、ともすると親を粗末にするところか、足の先きで蹴ちらかしてゐる。

大した力を養つたものだ……。

二こと目には「親が俺を生む時には碌な眞似はしてゐない」といふが、そんなことをいふ者に限つて、女房を持つて子供が出来ると、威猛高になつて親の威權を振り廻はす奴だ。

親の意見と茄子の花は

千に一つの無駄がない

と寄席あたりで、頭のツルリと禿け上つた先生が唄つてゐるが、遊び半分で聞き流してならぬ俚諺だ。

流石は武市瑞山となつて、海南勤皇の旗頭とあふがれるほどの人傑だ。親には至孝、君には至忠、身命を捨て、王事に奮起するところに千金の重みがあるといふものだ。

親に孝君に忠なる人あらば

我其人の足を洗はん

といふ歌があるが、この親孝行がこのごろでは廢り者になつてしまつた。

### 三 桃井道場の塾頭

當時市中で、劍客として鳴らしたものは、桃井春藏、齋藤彌九郎、千葉周作の三道場であつた。

桃井の塾は眞福寺のそばの大富町にあつた。瑞山が出ておつた土佐藩邸は鍛冶橋にあつたので餘り遠くもないところから、熱心に道場通ひだつたものだ。

瑞山の劍道修業といふものは熱心なもので、とう／＼通ひ稽古をやめてしまつて、桃井の道場に入りビタリに住み込んでしまつたものだ。

桃井といふ人は劍道ばかりではなく書道などにも達してゐる人物で、一見識を有した達人であつたから、夙も瑞山の常人でないことを見抜いたものと見える。

弟子が熱心なら、師匠も熱心になる譯で、双方の氣合ひがピッタリと合つたから、瑞山の上達は眼覺ましいものだつた。

間もなく瑞山は塾頭になつたのだが、桃井は自分のお出入りの諸藩邸に出掛ける時には、必らず瑞山を伴れて行つて、試合をさせたものだ。

それで段々と武市半平太の名前が各藩にも知れるやうになり、

仙臺の伊達サマ、出石の仙石サマなどからは、

「武市へ参るやうに……」

とお聲が、りりと呼ばれるやうになつたものだ。

今日の學生諸君が、學校よりカツフェーの方が面白いのと同じやうに、當時の門弟達も、稽古よりは悪所通ひをする奴が多くて、大分風儀が紊れて居つたものだ。

殊に桃井の道場の隣家に「藤棚」といふ茶屋があつたので、一層その藤棚へぶら下りに行くものが多くて、桃井もほと／＼困り果て、居つたものだ。

武市は部下淫靡の風を大いに慨嘆してゐたものだから、一日師範に向つて、

「サテ先生、どうもかように門弟の風儀が紊れては先生の御名にも關するやうな次第であるぢやによつて、この邊で何とか大鐵槌を下されんければ、今後とても始末に行かんようになりませう……」

と忠告すると、桃井は待つてゐたといはぬばかりに、

「そこぢやテ。わしも氣がつかんのぢやないが、何しろよい監督者のないのでのウ……實は

困まり果てゝゐるのだが、どうぢやナ、足下一つその大鐵槌を下して呉れんか」と今度は逆に先生の方から注文が出て来た。

「イヤ拙者などは、そんな大役は重荷でござつて、とても相勤まりませんが、それにしてもこの不シダラは見えて居られません。一つ拙者に一切の權能をお許し下さらば、一つ出来る丈けやつて見ませう」

といふので、それから瑞山が海南の大波で仕込みあけた風霜の氣節でもつて、第一に塾則を改正した。

そしてこの塾則に違ふものは、片ツ端から撫で斬り………そんなことはないが、兎に角法を厳正にしたもんだから、塾生の野郎共がブツ／＼不平をならべてゐるが、瑞山は秋霜烈日の意氣を以つて督責したもんだから、皆んなふるえ上つてしまひ、多年の弊風は、瑞山によつて一掃されたといふ。

#### 四 瑞山は「天皇好き」

萬延元年の三月に瑞山の祖母が病歿した。このお婆サンは大へんな長壽の人で、何でも八十九歳であつたといふことだ。

瑞山は至つて孝心の深い人だつたから、兩親の歿後は、この老祖母にかしづいて、暑さ寒さに心をくだいたものだ。

この祖母サンがいよく／＼亡くなつたので、瑞山が初めて天下四方の志を立て、此の年の七月に九州遊歴の途に上つたものだ。

その時瑞山は南海太郎朝尊の鍊えた新刀一振を腰にし、懷ろには一卷の「靈の眞柱」とを持つておつたのみだといふ。

いつでもゴタ／＼と持ち出すのは大概頭の方のよくない人間の旅行だ。

瑞山の旅行で思ひ出すのは、少し遠いところの例だが、フランスの大奈翁の初めての旅行の時だ。

彼れがまだ伊太利の一邊島にゐるころのことだ。いよく／＼フランスに出て大いに志を立てようと、住み馴れた故郷を出るときのことだが、後ちに母に送つたナポレオンの手紙に、

「我れ一劍を手にし、ホーマー詩卷を懐ろにし、今や世界征服の途に上る」といふのがある。當時ナポレオンは十五六の少年に過ぎなかつたが、蛇は寸にして人を呑むの兆しありといふ形だ。

國書一卷、寶刀一振の瑞山が矢張り非凡の姿をしてゐる。

この時の瑞山の旅行は、先づ長州に乗り込んで九州肥前に渡り、筑後の久留米に滞在し、それから日向を廻つて、海上伊豫に著し、土佐に歸つて來たのだが、この旅行が、瑞山の爲にはよい見學であつたのだ。

瑞山が出る時に、坂本龍馬がせゝら笑つて、

「今時の時節に武者修業でもござるまい」

と冷やかしたものだ、後には龍馬も矢張り諸國修業の人となつたものだ。

瑞山は學問といふほどの學問をしたのではないが、鹿村雅澄翁などの感化から、國學書は讀んだものゝやうだ。隨がつて瑞山の勤皇心は國學の方から受けたところが多かつたやうに思ふ。

そのころ「天皇好き」といふ仇名があつたくらるるだから、瑞山の勤皇心がどのくらゐ同志の間に認められてゐたかゝわかる。

井伊大老が櫻田でやられ、次いで安藤が井伊の遺業を受けついで、例の和宮御降嫁なんぞの問題も起つて、サア天下の浪士が承知しない。

水戸派や、長洲派の浪士などが、その急先鋒となつて騒ぎ出したものだ。

瑞山の同志に大石彌太郎といふのが、江戸で勝の門下に入つてゐるが、これが瑞山に飛書を與えて、

「どうも天下が可怪しくなつて來たから、こんな時に土佐の山の中に引き込んでゐる場合ぢやない」

といつて來たので、こゝで瑞山が中央に乗り出すの決心がついた。

花咲かば告げんといひし山里の

使は來たり馬に鞍置け

瑞山活動の時代は、文久元年に入つていよく大天地が開けたのだ。

## 五 學藩一致で勤皇

瑞山といふ人は、熱誠ある勤皇家ではあつたが決して血氣に逸るといふことのない人だ。こゝが自然と同志に推服された所以かも知れない。

和宮御降嫁に憤慨した同志が一堂に會して、いよく和宮の御輿を薩陀峠に待ち受けて、そこで奪ひとつてしまはふといふ計畫を評議した時、久坂なんぞも大いにその議に賛し、一身を捨て、皇國の犠牲にならうと覺悟をしたものだ。

そこで一座のものは誰れ一人の不賛者もなく、今や議は一決しようとする時に、今まで黙してゐた瑞山が、やをら口を開いて曰く、

「諸君の御意見は、まことに壯烈なものだ。しかしこゝに考へんければならぬことがござるそれは外でもござらぬ。和宮一件は朝廷より勅許あらせられてゐることだ。若し諸君がこゝで和宮を奪ひ奉つるとなれば、いはゞ勅許を阻むものとなる。心はさうでなくとも、幕府のこゝちやから、朝敵といふ名前にして處分をするのだ。これは策の得たものではない」

と落ちつき拂つて言ひ出したので、一同これには耳を傾むけざるを得なかつた。成る程「朝敵」の一事には氣がつかかなかつた。然らば、此の場合の策は如何と詰めよると、瑞山は、

「そこぢやテ。そんな匹夫の勇を振ふのをやめて、こゝは隱忍自重し、先づ各々藩國に歸るのぢや。そしてお互の藩主を説いて、藩主に従つて堂々と入朝し、閣老に向つて責め立つるのだ。この時に當つて閣老が猶ほも私曲を逞しうするとならば、その時こそ非を天下に訴へて、廣く人心の奮起を待つて事をあけるのぢや……」

と論じたのは、一同もその公明正大なるに服したさうだ。

「土藩に武市半平太あり」

といふ名が四方に傳はつたのはこれからのことだ。

後ちに同志に向つて瑞山がいつたことに、

「久坂もいゝが、どうも松陰先生の恨みを霽すといふ氣が先きに立ちすぎていかん」といつたさうだ。

これは如何にもよく久坂の氣持ちを道破したもので、こゝが久坂の猛烈な所以でもあり、



又たその缺點でもあるのだ。

尤も瑞山は久坂にも感服して居り、松陰には更らに推服はして居つたに相違ない。

初めて久坂が瑞山に逢つた時に、久坂は亡師松陰先生が、檻車して江戸に送くらるゝ時の詩を示して、松陰を瑞山に物語たものだ。

その時瑞山は、その詩の意味を、一々久坂に尋ねて、初めてその全篇の意味が解つた時に「我れ遠く松陰に及ばず」

といつて歎稱したものださうな。

久坂は瑞山が分からねぬところを恥ぢもしないで、一々尋ねたところにヒドク感心したものだといふ。

それから以後は、久坂は瑞山を稱して、

「武市は眞の國士だ」

といつて、幾度か往來して志を共にしたものだ。

### 六 瑞山と東洋

瑞山は何といつても勤皇の老手だ。同じ先覺的な運動をしても、燕のやうな飛び方をするのと、鷹のやうな舞ひ方をするのでは、大分異つたところが出て来る。

瑞山が一騎打をやめて、一藩の勢力を動かして、その上で堂々と立ちあがらうといつてゐるところなどは、舞ひ方が大きい。

然しこれは舞ひ方が大きいだけに、それだけ大骨が折れるわけだ。だから瑞山が一應土佐へ歸へると、先づ平井善之丞を動かさうとしてゐる。

此の平井といふ人は吉田東洋以前に大監察をやつた人だが「小野の聖人」といはれるる人だから、君子人でもあり勤皇家でもあつたのだ。

そのころ東洋の時めく時代だからこの小野の聖人は、郷里の野村に歸耕してゐたのだが、そこへ瑞山が尋ねて行つて、土佐勤皇の一大勢力を作りたいといふのに大賛成をした。

そこで瑞山が土佐勤皇黨の大運動を起すと、岡崎滄浪、平井隈山、坂本龍馬、中岡慎太郎

なんぞの連中が風を聞いて起り、高知七郡の有志が、こゝに瑞山の下に雲集するの勢ひとなつたものだ。

この勢ひを背景にして瑞山が吉田東洋に面會し、彼れの一大決心を促さうとしてゐるのは瑞山の大量だ。

瑞山は高知帯屋町の東洋を訪ふや、先づ第一に

「拙者今回の大擧は薩長兩藩士と盟約したこと……」と密約をさらけ出したものだ。

そして徐むろに天下の大勢を陳べ、勤皇の大義に勇往邁進せんければならぬことをまくし立てゝゐる。

東洋が感心して聞いてゐるかと思ふと、

「ウハ、、、」

と大聲をあけて笑ひ出した。そして如何にも落ついた言葉で、

「老成の武市氏、今度は浪士どもに擔がれたと見えるのウ……。元來京都のお公卿サンな

んぞといふものは、婦女子見たやうなもので、そんなものを相手にして何が出来るもんぢやない。それに我が山内家は薩長とは、少し色合ひが違つてゐることは考へなければならぬよ第一薩藩とは親戚つきにもなつてゐるから、薩藩が大いにやる肚があるのならば、當家にも使者ぐらゐるはありさうなものぢやテ。そんなこともないところを見ると、浪人者の空威張りに過ぎんのだらうよ」

とまるで相手にしない。東洋は東洋丈けのことをいふ。

瑞山は瑞山で、

「明春薩長兩藩が中央に乗り込んで、大いに周旋するといふのは事實でござる。して見れば、之れに隨ふ藩士の間で何事か行はれるといふことは足下のいはれるやうな、根も葉もないことと申されますまい」

といつたものだが、これは議論の相違だから、どこまで争つても一致する氣遣ひはない。ここで瑞山が東洋と袂を分つたのが、土佐勤皇派と、佐幕派との分裂の發端だが、當時の兩雄も神サマではないから、そこまでは氣がつかず、東と西に手を分つて、こゝに土佐維新史に

二大潮流を作つてしまつたのだ。一人の力といふものも、かういふことから考へると、偉大なものだ。

### 七 悠々たる老手腕

瑞山がどうにかして東洋を動かさうとしてゐるところが、何としても他の人には出来ない藝當である。

といふものは、一度ならず二度ならず、東洋に逢つて自説を繰り返してゐるから……。

大概なら、一度いつて聞かんければ、それで肩をそびやかして別れてしまふんだが、瑞山はそんな短氣なことはしない。

その後吉村寅太郎が土佐に歸つて来て、瑞山に平野次郎の義學を告げ、瑞山の奮起を促した時にも、

「平野もやつぱり匹夫の勇を奮はうとするのかなア……」と嘆息したさうである。

瑞山が、藩主を頭首に仰いで、堂々と乗り出さうといふ大志望は武市出色の面目である。瑞山のやり方がノロイといへばノロイ譯だが、老手腕はこのノロイところにある。吉村が天を仰いで高嘯するところの、

花未開唇柳眼嬌。

同人痛飲至深宵。

一家一國何須問。

欲使本朝爲本朝。

と叫ぶところは、痛快は痛快だが、足元が危ない。隣り村へ行くにも、川もあれば橋もあり一足飛びに飛び越えるわけには行かない。まして國家の大變革だ。随分と迂餘曲折があるのを放つとく譯には行かぬ。

ところが青年血氣の士は、そんな半まなことはしてゐられない。阪本龍馬なんといふ豪者は何時の間にか脱藩してしまふ。それに續いて我れも我れもと飛び出して、もはや瑞山の節度に服してゐない。

一方藩廳の方では、吉田の勢力が牽として抜くべからずで、何時までたつてもラチはあかぬ。そこでとうとう東洋排斥の運動を起すの己むなきに至つたものだ。

これにはいろく深い考へがあつての事で、單に奸賊斬るべしなどといふやうな簡單なことではなくて、瑞山もよほど考へぬいた揚句のやうである。

第一藩主が京都から伏見街道をとつて東海道へ下るころには、恰度久坂や平野等が、いはゆる義舉なるものをやつつける時機なのである。

そのころまで瑞山がノンベンダラリと高知で浮世繪を描いてゐたといはれては同志に合はず顔がないと考へたものである。

そこで何とか吉田のケリをつけなければならぬといふ瀬戸際に立つたのである。先づ吉田暗殺隊が三組に組織されたものである。それは

- 第一 岡本猪之助、同佐之助。
- 第二 島村衛吉、上田楠次、谷作七。
- 第三 那須信吾、大石圓藏、安岡嘉助。

頃しも萬延元年四月八日の夜だ。吉田東洋は己れを岨ふ刺客のありとも知らずで、城中において日本外史を講じ「本能寺の」一節を終つて、我が家に歸へる途中、ソボ降る雨の中に、「エイ」と紫電一閃、那須信吾が牙え切つたる一刀を傘越しに浴びせ、「元吉どの、國家の爲めに參る」大石、安岡の助太刀で、とうとう稀代の俊傑を泥まみれにしてしまつた。

### 八 手負にさしておけ

吉田を打ち果した同志の連中は、元吉の首を高知城下の雁切河原の札場のところに曝らしたものである。

そしてその下に墨痕あざやかに斬姦状を認めたものである。四月九日になると、サアこの事が大へんな評判となつて、高知城下をあけての大騒ぎとなつた。

昨日までは土佐藩の大宰相であつた吉田東洋が、今日は生首となつて中空に曝らされてる

るのだから、人民どもが驚ろかない譯はない。  
それでも流石に人望のないものでは致し方のないもので、見物衆の中で、誰れ一人、吉田に同情して、

「可愛さうに……」

と涙を流したものがなかつたといふから、争はれぬものである。

斬姦状の中には、勤皇とか佐幕とかいふ文字は、一字も用ゐてなかつた。これは役人に下手人の手がかりをくらすためである。

狀に曰く、

「此元吉事、重き役儀にありながら、心儘成る事を敢行、天下不安時をも不顧、一日も安氣に暮し度所存を以て、御國次第に御窮迫之勝手に相成候をも悟乍、表は御餘銀も有之候様、都合能申餘り、既に先年より御園に相成候、糶米追々存分措盡し、御國內御寶山等、不殘切拂、何に不寄、下賤の者よりは、金銀嚴敷取上、御國民上を親しむ候、心爲相隔、自分においては賄賂を食ひ、無類に驕を極め、於江戸表輕薄之小役人へ申付、御名

をタバカリ、結構なる銀之銚子を相調、且自己の作事、平常の衣食住、彌々華美を極め候事も、此儘差置候ては、士民之心、彌々相離れ、御用に立ち候者、一人も無之様相成、御國滅亡之端とも相成候に付、不肖之我輩共、無餘儀勘忍難成、上は國を患ひ、下は萬民艱苦を救ん爲め、己之罪を忘れ如此取行ひ、尙又さらしおくもの也

戊四月

この文面によると、吉田を殺したのは、彼れの佐幕論に慨した行爲であることは、一言半句も記されてゐない。天誅を下すの唯一の原因は國內向の政治がわるいといふにあるのだ。

こゝはよほど考へたものであるが、この邊のことは、瑞山とは少しも關係がないといふ話である。

拙者が或る人から聞いたところによると、瑞山は、初めから東洋を殺せとはいはなかつたものださうだ。

何でもこんな意味のことをいつたものだといふ。

「吉田は如何に拙者が説いても我説を用ゐないから、彼れに一大決心をすゑさせる爲めに、

一撃を加へてやるのだ。だから殺すには及ばぬ。手負ひにさしておけばそれで澤山だ」といつたものである。

しかしこれはその場になつて見なければわからぬ。殺さぬつもりでも、勢ひでは殺すやうな羽目となり、殺すつもりでも遣り損ずる場合もあるのだから、「殺すナ」といつても刀の抜き方では、東洋の首を頂戴するやうになるのは、致し方もない話で、瑞山も覺悟はしてゐたが、くれぐれも「殺さぬやうに」と戒しめたものださうである。

### 九 流石は一黨の首領

文久三年といふ年は、幕末史中では、随分混雑をした年だが、島津久光や、松平春嶽や山内容堂や、天下の賢諸侯ともいはれる殿様が、足しけく京都に往復したものである。

この間に盛んに暗殺は行はれる。双傷は演ぜられるといふ騒ぎなので、一日として安き心もない有様だ。

瑞山の率ゐる土佐勤皇黨も、尊攘の大義を一圖に思ひ込んでゐるところから、盛んに劍戟

を演じたものである。

そこで容堂もやゝこの瑞山の一味に厭氣がさして、板垣退助を以つて、勤皇黨に對抗する一隊を作らしめたものだ。

かうなると兩派の争鬭といふものは免がれない。一方では「瑞山を葬むれ」と叫ぶかと思ふと、一方では「板垣をやつつける」と怒鳴つてゐる。

今にも大喧嘩となりさうな形勢だもんだから、瑞山は心配して、自身板垣の許へ出掛けて行つて談判したものだ、納まりがつかぬ。

瑞山一味の連中は、容堂の勤皇振りが足らぬといふので、調を請ふて大いに奮發せんことをすゝめ、若し聞かれずんば脱藩しようとする形勢が出来た。

瑞山はひどく心配して、この時は決死の覺悟で容堂に謁したものだ。

瑞山は容堂の前に出るや、例の同志の血誓文を御覽に入れた。そして吉田を暗殺したのも我が同志中の仕事であることを、些の隠すところなく自白に及び更らに進んで攘夷の勅使の再東下について運動した次第をのべたものだが、さすがは容堂である。瑞山の申立てを聽

き終ると、

「汝のいふことはよく相分つたぞ。しかしその血誓書なんぞは残ると面倒ぢやから、火申した方がよからう」

といふやうなことで、却つて瑞山はお讃めの言葉に預つたものである。

容堂は取りあへず、酒肴を運ばせ、

「お前の忠心に向つて、杯をとらせるぞ。予が自から酌をしてつかはす……」

といふ譯だから、瑞山は殊の外面目を施し、御菓子折を頂戴に及んで退出したものである

容堂は、平生、

「武市もいゝが、無學だチト困まる」

といつたものだが、瑞山はそんなことに更らに頓着しない。スタコラと同志の集合してゐる平井隈山の旅舎に来て一伍一什を話したので、流石に猛り立つた勤皇黨の面々も一時鎮靜することを得たものである。

武市が當日出掛ける時には、これだけのことをいへば、とても自分の命はないものだ。立

派に切腹して来るから後のところは、よろしく頼むといつて、早朝に起きて齋戒沐浴して出掛けたものさうだ。

その時武市がいふには、

「武市は武市ぢや。諸君は諸君ぢや。武市が死んだからといつて諸君も死ぬには及ばぬよ。

諸君は諸君で、大いに國家の爲めに粉骨碎身して貰はんければならぬ……」

と懇々として戒しめたものだといふが、流石は一黨の首領である。

### 十三文字に割腹

文久三年九月二十一日の早天のことだ。瑞山の同志島本審次郎に向つて、直ちに藩廳に出頭せよとの命令が達した。島本は早くも一大事を直感したので急を瑞山に傳へたものだ。ここで同志一同は、

「苟くも事件の公卿に關係あることゝ、山内家に關するものにと就いては、どんなことがあつても一言も吐くまい」

と誓つて、たうとう斷罪の辭に窮せしめるに至つたのは美事なものでつた。

瑞山がその足で我家に歸ると果せるかな、藩の役人が來てる。瑞山は平然たるもので、「拙者はまだ朝飯前ぢや。一寸お待ち下されい」

女房富子のお給仕でゆるくと朝飯をしたため、やをら立ち上つて、用意の駕籠に乗り、南會所へと送られたものだ。

それから元治元年の一年間は獄中生活を續け、足掛け三年目の慶應元年に切腹となつたのである。

獄中にある間には、役人がいろくく瑞山を問ひ試むるけれども遂に要領を得ない。たうとう持て餘して「屏風園」といふもので白状させようとしたものだ。

この屏風園といふものは、白洲に引立て、罪人あつかひにするのではなく、大監察とか參政とかいふ重役が、ぢかに瑞山を呼び出して、座敷に通し、屏風を圍んで、相對で座談に問ひ試むる方法ださうだ。

後藤象二郎が此時は大監察として取調べたものださうだが、瑞山があまり實を吐かないの

で、或る時後藤が、

「武市瑞山先生といへば立派な武士と存じたるに、物を隠すとは武士の面目にあるまじき卑怯な振舞ひだ」

といつたので、武市は、

「卑怯といはれては武士の一分が立たぬ」

と憤慨して、それから少し手掛りのあることをいつたさうだが、それでもたうとう吉田暗殺のことは要領を得なかつたさうだ。

いよく切腹と極まつた時に瑞山は、

「切腹々と一口にいふけれども、實は切腹には三通りの方法がある。第一は一文字に切るのだ、第二は十文字だ。第三は三文字といふ切り方だが、俺は三文字でやる」

といつて、立派に三文字に割腹してしまつたさうだが、検視の役人も、これには驚いたさうである。

時は慶應元年乙丑閏五月十一日の事で、武市半平太瑞山が正に三十七歳の若盛りだつた。



虫の音もいと悲しく聞えけり

今宵かぎりの秋とおもへば

これは瑞山獄中の和歌だ。

世をおもふ心の足らでかゝる身は

隙もる月の影も恥づかし

とも詠じてゐるが、その心根の清くして高いことは、古への聖人の道を踏むものゝ心がけがある。

大業由來以忍成。

一榮一辱莫關情。

若無跨下淮陰屈。

何得他年百萬兵。

これは同志の一人河野萬壽彌に與へて、少年血氣を過まるを諷したものである。

「忍」の一字によつて大業は成るといふ瑞山の教戒、今日でも我々によい誠しめである。

清河八郎

一 東北人士の誇り

「ところ變はれば品變はる」

それだけのことを學者にいはせると、他人論となつたり、社會學となつたり、えらい六ヶしいことになる。だから閑人は學者ほどうるさいものはないと思ふてゐるのだが、いづれに對しても、處變はれば、品變はるに相違はないのだ。

その學者の口眞似をして申しあげると、明治の御一新といふものは、關東派に對して關西派が天下を取つた形だ。

封建政治の打破なんていふ六ヶしい事からいふと、先づ源賴朝を擧げんければならぬがその賴朝時代の源平二氏なるものからして關東の產物だ。

それからア、大あらしのところを數へて見ても、北條氏にしても、足利氏にしても、織田氏にしても、豊臣氏にしても、ずっと下つて徳川氏三百年の覇業にしても、皆んな關東派から出てゐる。

この點からいふと、日本の中世以後近世に至るまでの武人政治の天下といふものは、まるで關東派の獨占といふ形だ。

此の中で九州へ行つたものはないでもないが、それは平氏のやうに殲落して行つたものか又は足利氏のやうに軍さに敗れて逃げ場所にしたくらのもので、九州そのものからは、遂に天下を平定するものが出なかつた。

これは九州に豪傑が出なかつたわけではないが、何しろ海山千里を隔てゝる果ての果てだから、手が届きかねるのだ。

それが明治の御一新となつて、初めて關西派が關東派を打ち破つて天下を取つた形となつた。

勤皇派の重鎮となつた、いはゆる薩長土肥、皆んな關西派といつてよい。一は中國の西端一は四國の南端、他の二つは九州だ。

かういふことからいふと、明治の新文化といふものは、主として「西日本」の覇氣満々たる青年によつて作られたといふてもよいが、それかといつて、何もかも關東派、いひかへれ

ば「東日本」の連中が、皆んな老化して腐つてしまつてゐたかといふと、さうは簡単に申されぬ。

上野の彰義隊にしても、會津の白虎隊にしても、精神にして義に篤い、關東武士の面目を躍如たらしめてゐるのだ。

その中でも、又一つ毛色の變はつたのは、庄内藩の士風だ。

庄内の史的プロセスなんかを述べてみると、何時までかゝるかわからんから、先づは略しておくが、御一新の當時は、徳川氏の爲めに官軍に抗したものだ、勤皇の義氣は、忽ちにして西郷南洲の意氣に投合し、關軍では珍しい勤皇の藩となつて、妙に違つた花を咲かしてゐる。

西郷なるものゝ、あの大人格に動かされた點もあらうが、一たびは朝敵とまでもなり、西郷が來たら、生きては歸へさぬといつたものが、明治十年の戦争には、西郷に與みして、薩南の軍に加はつたものさへあるのだから面白い。

いはゆる庄内藩の士風を代表して、幕末の天地に、卓然として頭角を現はしてゐるものを

誰れなりやと見れば、こゝに一代の奇傑清河八郎正明ありといはなければならぬ。  
然らば清河八郎、彼れ果して何者か。百花地に委して新緑のもゆるが如き正明の人物を一願して見よう。

## 二 攘夷の一番槍

三月の桃、四月の櫻、何といつても、春はお娘子たちの世界だ。野にも山にも、春を歡樂に舞ひ遊ぶ娘の袖がひるがへる。

山寺の春の夕べを來て見れば

入合の鐘に花ぞ散りける

といふ能印法師の歌が、そのまゝの情景を現すところになると最早や天地は一新するのだ。

紅に代はるものは縁、春愁に代はるものは活躍、女に代はるものは男。その男の中の男に清河八郎がござる。

碧落より吹き來る青嵐に、蒼天高く吹き流したる、皐月の鯉の尾を振ふ姿こそ、八郎が颯

爽たる男振りだ。

吉田松陰は高杉東行を評して「任意自用の風あり」といつてゐるが、この任意自用の語にそのまゝ當てはまる人物が清河八郎だ。

八郎が自敘傳といふべき文章の中に、

「拙者事、多年文武の道に志し、此迄士林にも優遊いたしあり候得共、天性の豪果なる氣性にて、とても文字章句などの間に、區々いたしある事かなひ難く、是非とも天下に義を唱へ申度……」

と書いてゐるやうに、生れつき豪俠の士で、自から「天下第一流の人物」を以つて任じて居る豪傑だ。

文字章句なんかに没頭しては居られぬ。と自分ではいつてゐるが、しかし八郎はなか／＼文字に秀でた人間で、著述の多いことにおいては、吉田松陰に匹敵するくらゐで、文章の上手なことは松陰以上のところがある。

しかし御本人は文章なんぞは餘技ちやとしてゐるから、近ごろの文士なんぞとはまるで大

ちがひだ。

清河は一方においては立派な劍客で、千葉周作の門弟だ。腕も立派なもので、劍客としても一家を爲して居つた。

だから彼れの人物をザツと引つくるめて申すと、先づ何だ……。松陰の文章と、高杉の氣象と、瑞山の劍道とを一緒に丸めて、こねあけたものが清河八郎正明だと思つたら、大たい彼れの風采を察することが出来やう……。

彼れの交りを共にした人物に藤本鐵石があり、山岡鐵舟があるのを見ても、八郎が同氣相求むるところの、何邊にあるかわかる。

八郎が、或る時、鐵舟に書を贈つて、

「我が輩は攘夷の一番槍りをやるのだ……」

といつたことがあるが、この「攘夷の一番槍」といふ言葉が八郎の人物を躍動せしめてゐる。八郎は人後に落つるなんといふことが大嫌ひだ。何でも第一番、第一席を占めんければ氣がすまん。年少客氣の風があつて、稚氣満々といへばそれまでのことだが、男らしいところ

が買ひどころだ。

天保元年に初まつて、文久三年に終る、三十四年の清河の一生は、決して長くはないが、手に唾して天下の風雲を捲き起し、蛟龍の池中より起つて蒼空に躍り上るやうなところは、六十や七十まで生きて、妥協政治なんぞでゴマかしてゐるやうな人物の一生とは、まるで比較にならぬ。

### 三 死出の山路の魁け

幕末より維新に當つて、人才の乏しかつた東國に起つて、その名を天下に謳はるゝものに會津の雲井龍雄があり、北越の河井蒼龍窟があり、庄内の清河八郎がある。この三人は、いづれもその性格を異にしてゐるが、鐵石よりも堅き心腸、彩虹の如き氣魄、泰山に均しき膽略とに至つては、三者ともに流石に東國武士の特殊の風格を示してゐる。

清河の無二の親友であつた藤本鐵石が、八郎の座像を畫いたものがあるが、それに八郎自から讚をしてゐる。この肖像は、少しをとなく出来てゐる噂さがあるが、清河の自讃では

かうかいてある。

發身芻蕘人。

修文修武。

心存皇朝。

氣吞夷虜。

輕賊愛士。

慷慨自苦。

毅々精神。

落々面部。

嗟乎奇矣。

性之所取。

文久二年壬戌初夏清河正明自讃とある。數言の間に清河の心胸を表現し盡してゐる。魁けてまたさきがけん死出の山

まよひはせまじ皇の道

といふのは、八郎が文久三年に暗殺せらるゝ當日認めてあつた和歌だといふが、どこやらに辭世の歌らしい香りがするの不思議なものだ。

「さきがけてまたさきがけん死出の山」といふ言葉が、いかにも清河の意氣を示してゐる。

生きて勤皇に魁がけるばかりでは、まだ氣がすまないで、地獄行きまで一番乗りをしよう

とするところが氣に入つた。

嘉永三年ごろの作だと思ふが、八郎が京都をブラついて禁闕の荒れ果てたのを見て慨嘆してゐる詩がある。

白日沈西光漸孤。

東雲向曙亦斜驅。

可憐禁闕天庭外。

百氏門前草廢蕪。

草原より起つて、勤皇の魁をなす志士の面目が見える、高山彦九郎や、柴野栗山の詩を

見るやうな氣がする。

ひとたびは東の風にちらされて

再びあくる西の白雲

東といふのは江戸を指さし、西といふのは京都を暗示したもの、勤皇の志は脈々として三十一文字の行にうごいてゐる。

うてばきりふれば屠る劍おひ

またはくゞらじ大和魂

馬觸るれば馬を斬り、人觸るれば人を斬るといふ日本刀を手ばさんでゐる日本男兒ぢや。

支那の韓信の股くゞりなんぞは、まねたくもないといふのが、八郎の意氣ぢや。

砕けてもまた砕けても打つ波は

岩かどをしも打ち砕くらむ

精神一到何事かならざらんの意氣を示したものだ。

一度入學試験に落第でもしようものなら、すぐに鎌倉あたりに逃げ込んで、青い顔をして

ピンブリコをきめる現代青年なんぞとは、どだいくらべものにならん。

少年豪氣自難收。

依劍飄然事遠游。

只伯爺嬢倚門望。

天涯狐客倍羈愁。

矢でも鐵砲でも来い、といふ八郎も、遠く故郷の老いたる兩親を憶ひては、シク／＼と泣き虫になるところに忠臣孝子の面目がある。

#### 四 残雪を踏んで江戸遊學

清河が初めて江戸へ出たのは十八歳の時で、弘化四年の五月ごろのことだが、山又山の難所を越える時には、大へん雪に憊んだものださうだ。

清河の日記の中にも、

「六十里を越ゆ。艱難言ふべからず。残雪道を埋め、屢々方を失す。加ふるに煙雲東西を

覆ひ、實に天險之地なり。自から以爲らく、志あらずんば豈獨り過ぎざらんやと。蛇蜒高下、行くこと四里ばかりにして志津村に至る……」

途中の困難も困難だが、第一出京の發端から、並大ていの苦勞ではなかつたのだ。家は貧乏であるから、固より旅費はなし、出羽の山奥から江戸見學なんどの、洒落れたことの出来る身分ではないのだ。

だから父親の許しのないのは明らかなことだから、亡命ときめ、同郷の畑田某といふのが恰度勤番で出るといふ話があつたので、畑田に相談して、伴れて行つて貰ふことにしたのである。

途中まで来ると、果せるかな追手が来た。

「親爺サンの話では、武士たるものが亡命なんぞをして出掛けるのは面目がない。出るなら出るで、公明正大、堂々と出掛けよ。だから一度家に歸つて更らに出直したらよからう……」との傳言だ。

清河は言下にこれを斥けて、

「厭だ」

「しかしお約束の畑田氏にも上京の必要がないとの藩命があつたので、お前も一度歸つたら……」

「畑田は畑田、清河は清河ぢや。これより孤筇天涯の孤客となるまでぢや……」

何しろ、五月の二日に、曙の光のまだ地上に落ちないころに、我家を立ち出たときに、

「嗚呼我れ十五歳、志を抱きてより、今に三年、顛沛忘るゝ能はず今に至りて漸やく果たす……」

といつてゐるくらゐだから、相棒が居なくなつたくらゐで、オイソレと止めるわけのものではない。

旅費はどうしたかといふと、先づ狩川某に十兩の借金を申込んで謝絶され、半分に値下げをして、今度は畑田に五兩を借りる約束をした。ところが、いよくとなつた時に八郎の懐ろにあつた金は僅かに一兩三分であつた。

今日と當年とは物價が異ふといふものゝ、一兩三分で東北の果てから、江戸まではチト



心細い。

それでも江戸に着いた折には百二十四文を残しておつたといふから、えらいものだ。しかし、これでは食つて行くことが出来ない。サアこれからが、八郎の流離顛沛が初まるのだ。

それから伯父の世話でもつて神田お玉ヶ池にあつた東條文藏の邸に住み込むことになつたのだ。

面白い話は、八郎が江戸に着いた翌日、早速吉原見物と出掛けたものだ。

ところが誰れ一人として八郎を呼び入れるものがなかつた。よほどの田舎ツボと見えたものだらう。八郎曰くだ。

「これで拙者も意を強うした」

### 五 天下の周遊

初めて江戸へ出てから以後の清河は、先づ二十臺の全部を諸國遍歴にゆだねてゐる。

諸國遍歴といつたところで、何も天蓋をいたゞき尺八を吹いて親の仇敵を捜すのでもなければ、頭巾を被つて俳句行脚をするのでもない。それかといつて一衣を纏ふて雲水をするのでもなく、志すところは、天下の形勢を極はめ、諸國の志士と交り、例の「攘夷の一番槍」をやるのにあるから、随つて旅行のしぶりも違つてゐる。

清河の國事運動といふのは先づ三十歳以後、四五年の間のこと、二十臺の間は、天下に周遊して志を廣うしたものだ。

八郎が江戸へ出た翌年、改元されて嘉永元年となつたが、この年、伯父に伴はれて、東海道五十三次を押し下つて、京都、大阪を廻り、それから更らに西行して備前の岡山、安藝の廣島、周防の岩國城下を経て、一應京都に歸り、又々旅装を新らたにして大阪から今度は紀州路に向ひ、高野山の靈場に入り、吉野に南朝の古趾を尋ね、舊都奈良の都から伊勢路に入り、尾張路に出て江戸へ歸つたものだ。

嘉永三年に、二度目の出京を試みる時には、親爺サンも決心したと見えて、もうその時には止めなかつた。

雲井まで登らばかへれ揚雲雀

といふ一句は、その時親父サンが八郎をはけました、はなむけの句である。

この時には、八郎は直ちに江戸へは行かず、道を北國路にとつてから先づ京都に入り、中國路を下つて、九州まで分け入つたのである。

だからこの時は正月に家を出てから、やつと九月になつて江戸に來たものだ。

劍道を千葉周作に、學問を安積良齋に學んだのは此の年以後のことで、嘉永六年、二十四の四月に、松前から北海道にまで渡つて、民情を視察して歩いたものだ。

年が代つて安政二年、清河が二十六歳の時に、國元から母親を伴つて、見物に出掛けた。この時には、北越路から伊勢、京都、四國、九州といふ路順で、母親を慰めながら孝養をつくしたものだ。

それからは、江戸に居をかまへて、駿河臺や、お茶の水に塾を開いて門弟を養つたものだ。清河ほど無暗に諸國を歴遊した男も先づ少なからう。

靜坐書窓下。

閑看竹影移。

心孤關机上。

未識市塵思。

足にまかせて山川を跋涉して以つて快とする清河ではあるが、またこの靜歡の境地もあつた。

閑窓甘午睡。

頑枕與頭親。

天外聞山雨。

夜來漾夢神。

かうした閑境を有つことも出来る男だ。

窓外擁松樹。

綠陰侑懶眠。

覺來晚籟冷。

日撤鳩巢邊。

絆々たる餘裕を示してゐるところが、他年の英發ある所以だらう。朝から晩まで荒繩をなつてゐるわけにも行かんからのウ……。

六 清河と天狗黨

一時、水戸の天狗黨といふものが、大へん評判となつたことがあつた。

この天狗黨といふのは、尊皇攘夷の連中が、一種の徒黨を組んだやうなものだが、中には随分如何はしいのもあつたやうだ。

攘夷の資金、つまり軍用金を集めるといふどころか、盛んに近郷近在の郷家を荒しまはつたものだから、天狗々々といつて懼れ戰のいたのである。

「潮來出島の眞孤の中で……」と諺はるゝ、あの潮來に陣取つて四方ををびやかしたものが、人数は百人足らず、六十人ぐらゐるものであつたといふ。

藩の役人なんといふものは、カラ意氣地のないもので、藩の都合で、取鎮め方を受けてる

ながら、この天狗黨の威勢に怖れて、遠捲きに取りかこんで、ワイ／＼いつてゐるばかりである。

この天狗黨に眼をつけたのが清河八郎だ。清河は横濱あたりの外人を襲撃して、攘夷の一番乗りをやらうと思つてゐるので、頻りに同志を四方に求めてゐた折柄だから、水戸の天狗黨といふものゝ亂暴に着眼した。それはこれらの奴輩が若し力になるなら、一つ同志に加へてやらうと思つたからである。

文久元年のことだが、このころには天狗黨がますます横行して、下總邊まで荒し廻はつて幕府も手のつけやうがないといふ評判となつて來たので、清河は一僕を隨へて、成田山參詣の旅客として先づ下總へと乗り込んだ。

そのころ神崎村に住してゐた村上政忠といふ人がある。この人は清河とは舊知の間柄であるから、先づ村上に落ちついたものだ。こゝで石阪宗順といふお醫者サンに知り合ひになつた。

此の石阪といふお醫者サンは元彦根藩の人で、なか／＼膽略の据はつた人物であつた。

清河が佐原の城下（じやうか）に乗り込んだ時にも、往來（わうらい）は寂（さび）としたもので、夕方（ゆふがた）になると、もう人影（ひとかげ）もないくらゐであつた。

これは全く天狗黨（てんぐだう）を怖（おそ）れてゐるたからで、清河の姿（すがた）を見ると、里人（さとびと）が皆（みな）、

「ソラ天狗（てんぐ）だ！」  
といふので、逃げ走（は）つたものだ。兎（う）に角（かく）天狗黨（てんぐだう）がどのくらゐ怖（おそ）れられてゐるたかは、全く想像（さうぞう）以外（い）だつたらう。

いよく清河（きよがは）が潮來（しほ）に乗り込むといふので、石阪（いしがた）、村上（むらかみ）の三人（さんにん）同道（どうだう）で、鹿島參詣（かしましんげい）といふふれ出して出掛（でかけ）けたものだが、道々（みちづ）で人（ひと）らしい人は、まるで見掛（みかけ）なかつたといふ。

取りわけ四五歳（さい）ぐらゐの小供（こども）が、清河（きよがは）等（ら）を見ると、道の兩側（りやうがは）に土下座（どげざ）をして、頭（あたま）を地上（ちじやう）にすりつけて長まつてるのを見て、流石（たうじき）の清河（きよがは）も驚（おど）ろいたさうである。

清河（きよがは）はこの有様（ありさま）を見た時（とき）に、

「これは何（なん）だ。天狗黨（てんぐだう）の暴威（ぼうい）に怖（おそ）れるのもあるには相違（さむ）ないが、これが戰國（せんごく）であつたら、こんなことにもなるまい。考（かんが）へて見（み）るとこれも、三百年（さんぱんねん）太平（たいへい）の惰眠（だうみん）をむさぼつた罪（つみ）だ……」

と嘆息（たんそく）してゐるが、全くその通りだ。腕（うで）に覺（か）えがなから枯柳（かろう）を見（み）ても、すぐ（すぐ）に幽靈（ゆうりやう）に見（み）えるのである。

### 七 天狗黨（てんぐだう）を見（み）くびる

清河（きよがは）は、天狗黨（てんぐだう）に逢（あ）つて、彼等（かれら）の本心（ほんしん）を糺（ただ）し、用（もち）うるに足（た）るならば、大（おほ）いに同志（どうし）中（ちゆう）に加（か）へてやらうといふ考（かんが）へだから、天狗（てんぐ）の名（な）を聞（き）いても、少（すこ）しも驚（おど）ろかない。

佐原（さはら）の江戸屋（えどや）といふのは、天狗黨（てんぐだう）の定宿（ぢやうしゆく）だといふことを聞（き）いたから、清河（きよがは）はワザとこの江戸屋（えどや）に泊（と）り込んで、三人（さんにん）で大酒（おほいしゆ）をくらひ、高歌（たうか）放吟（ほうぎん）したものだから、宿屋（しゆくや）の連中（れんちゆう）が驚（おど）ろくまいことか、テツキリ天狗（てんぐ）と見（み）込んだので、矢鱈（やたら）に御馳走（ごちそう）をする下（した）にもおかぬもてなしぶりだつたといふ。

それから一行（いっけう）は舟（ふね）で利根川（とねがは）を下（くだ）つたが、舟（ふね）の中（ちゆう）で大聲（おほこゑ）をあけて舟唄（ふねうた）なんかを唄（うた）つたものである。

兎（う）に角（かく）この傍若無人（ぼうじやくびじん）のふるまひが、天狗黨（てんぐだう）の耳（みみ）に入（い）らぬわけはない。潮來（しほ）に舟（ふね）をつけて、

一寸した茶店に入ると、茶店の婆サンが驚ろくの驚ろかないの、

「旦那サマ方はどちらからお越しかは存じませんが、この近所に天狗黨の連中が、七十人も寄つてゐるさうで、他所から参らるゝ方がござりますると、きつと、取り調べますので、へい。今にこちらへも乗り込んでまゐりまするに違ひござりませんから、どうぞ、お静かに」とオドクしてゐる矢先に、いよく天狗連の二人がやつて来た。

「何やら劍術つかひらしい男が参つたさうだが……」

婆サンは腰を抜かささんばかりにして奥へ告げると、こゝでは石阪が土地の事情を知つてゐるので、

「一人は近所の醫者だ、他の二人は東都江戸において名あるお歴々だ」と返詞をさせた。こちらの三人は例の大酒を飲み、飲めや唄への大さわぎをしてゐると、天

狗黨は明朝松本屋といふ旅宿で逢はうといつて来たが、明朝になつても何の挨拶もない。そこで清河が、

「これは駄目だわい、我々二三人のこの人もなければなるふる舞ひに、怖けがついたとは、案外

の代物だ。こんなことでは攘夷なんぞは思ひも寄らない。扱ては、鳥なき里の蝙蝠で、こんな臆病天狗では話にならぬ……」

といつて、サツサと引きあけて歸つてしまつた。

清河が天狗黨の爲めに圖つて上中下三策があるといつてゐるがその策は、

上策 直ちに横濱に打つて出で、攘夷の魁を爲すのだ。

中策 ならば、先づ遠近を征略して、義兵を募ることだ。

下策 はこの土地に居つて、戦ひを始め、天下の義氣を振はしめるのだ。

といつてゐるが、實際の天狗黨がこんな風では、三策ともに行へたものではないのだ。

清河曰く、

「此の三策あるべきを、一策も行はずして、困獸猶戰ふの理もなく、窮鼠反つて猫を喰むの勢もなく、甘んじて散亂せること、時機を知らぬ天狗共と情けなくこそ思はるれ」清河も年少客氣の士だから、兎に角も目覺ましい舞臺を望んで居つた。天狗黨が底力のあ

る連中であつたら、清河もその一人となる人間である。

八 田中河内介と清河

そのころ京都に田中河内介といふ勤皇家があつた。此の人は中山忠能卿の家臣で、なかなか出来た人間であつた。

文久二年、薩州の島津久光が上京した時に、栗田の宮の繪旨といふものを作つて、攘夷の實行を試みやうとし、この計畫の中に、久光を捲き込む算段をしたのは此の男である。

清河がこの田中を訪ふのは、恰度文久元年の十一月で、大いに此の義舉に参畫したものである。

田中は先づ肥後兩藩内の知友に宛て、義兵を募るの檄を書いたもので、此の使命を帯びて九州に下つたのが清河であつた。

當時清河は同志の安積五郎、伊牟田尚平の二人と同伴で、大阪から小倉行の便船に乗つて西下したものである。

先づ肥後の松村大成といふ人を訪ひ、それから平野國臣や、小河一敏や、眞木和泉なんか

と義舉の打ち合はせをし、此の年の暮れは豊後の小河一敏の宅で年を取り、翌文久二年早々に東上したものである。

平野、眞木、小河、美玉などの同志も相次いで東上し、文久二年の初めには、義舉の計畫が着々として進行し、久光も四月の九日に大阪に着いた。

ところが久光は元來公武合體論者で、浪士連の計畫してゐるやうな、突飛な攘夷には賛成する先生ではない。

そこで、これは久光を當てにしてゐたのでは心細い。殊に宮廷内では、久光の建白ぐらゐで、直ちに攘夷に賛成してしまふ譯もない。朝裁を得るまでには、随分手間がとれるに違ひない。

といふので、同志の中でも若手の連中は、これは久光を嫌が應でも引きずり出す方法を取るより外はないといふので、久光が伏見まで来るまでは、一切靜穩を粧うて久光の眼をくらまして置き、いよく伏見に入つたら、俄かに同志が京都に亂入して、佐幕家の連中を叩き切つてしまふといふ腹をきめた。

四月二十三日の寺田屋騒動といふものは、これから起つたのだ。これは寺田屋に集合してゐる薩藩士を中心とする一味のものが、不穩の計畫があるといふことが久光の耳に入ったので、久光が命じて打ちとらしたものである。

それから田中も身邊が危なくなり、一時身を薩州にのがれようといふので、舟で瀬戸内海を下る途中で、薩藩士が因果を含めて殺したといはれてゐる。

この田中河内介のことについては、いろいろいふべきことがあるが、こゝには必要がないから略して置く。

命をすてゝ勤皇に盡す志は立派なものだが、かういふことはあまりに輕るはづみでない……。

どうも少壯血氣の士のやることは事功をいそぐから失敗が多いやうだ。尤もかういふ失敗が続いて、初めて御一新の大業が出来上つたのもあるから、失敗必ずしも失敗でないのは固よりのことだが、それにしても武市や西郷なんぞのやり方は、どことなく大浪のゆれて來るやうなところがあつて、流石に第一流の人物たることを思はしむる。

九 お蓮さん

清河はとうたう女房を持たなかつた。たゞ妾が一人あつた切りであるが、この妾も早く獄中で死んでしまつた。

尤も清河ばかりでなく、當時の志士なんていふ手合ひは、女房なんといふ手足まとひの物品を抱き込んでゐる閑日はないのだ。だから、有志の多くは無妻の人が多い。

苟くもこの世に男子と生れ、それでは餘りに情けないではないかと云ふ不埒者もあるかも知らぬが、人生の快事なら、到るところ青山あり、紅花ありだから、近ごろの青年見たやうに、夏の眞盛りを、夫婦して汗になつてまで、くつゝいて歩かなければならぬ必要は更らない。

清河の妾といふのは、遊女でお蓮サンといつた。遊女に似合はぬ堅氣の女で、清河の爲めには随分つくしたものでらしい。

お蓮が獄に入つたといふ譯は清河が例の天狗見物に行つて、江戸に歸つた時に、柳橋の萬

八樓で有志の會合をしたことがある、その時の歸り途で人を斬つたことがある。その事を種にして幕吏が清河を捕縛しようとしたときに、清河は直ぐに川越の奥富といふところに逃げたが、家に残つてゐた弟の熊三郎と池田徳太郎と、妾のお蓮サンとが捕まつてしまつたのである。

それからお蓮サンは清河の人質のやうな具合になつて牢の中に入つたものだが、そこは女の身だから、その苦勞は一通りではなかつたと見える。

妾が牢死したことを聞いて清河が追悼の歌を詠んでゐる。

追悼家妾

さくら花たとひ散るとも壯夫の

袖にほひをとめざらめや

同

たをやめがゆくえもしらぬ旅なれど

たのむかひありますらをの連

といふのだ。「頼む甲斐あり大丈夫の連」といふのは、同志の者といつしよに牢死したことをいふのである。

その時の八郎の手紙に、

「れんは、閏月中、牢死の由右屋敷へ下りて没命なれば、一段大慶、併誠に不便の至、段々御手を盡し被下候由、感慨仕候。彼もいやしき身とは申しながら、至つて正路のものにて、此方をまことに大切に致しけれ、多年人数を結び候爲、いろく内實の難苦もいたし候得共、一向にあしくも思はず、専ら人の爲に世話ばかりいたし、その身の衣服等は、不申及あたまのかざりものまでも、さらに求め不申、私同前に苦しみ候て、内實感入たる事多く有之故、同志中にも悉く稱讃せられ、只今までも不便々と申居候處、果敢なく相成誠に可憐事に御座候。……たとひ死するとも報國赤心の壯士と冥土同伴ゆえ、少しは幽魂もなぐさむべし、卑しき處より出て、天下にともかく名を出す事は、容易ならぬ事、不幸中の冥加もあるべく、右に付ても本妻とてもなければ、彼は私の本妻同前に思召、家内位牌を建、事済の上は、石塔等もよろしく奉希上候……」



といつてゐるのを見ると、やさしい志士の情けが文面にあらはれてゐる。お連サンの戒名は清林院貞榮香花信女といつた。これは清河自からつけたものだといふ。

### 十 新徴組と新撰組

文久年間と申せば、例の「天誅組」や諸國勤皇の浪人が、京都市中で荒れ廻つた時代で、芋の子のやうに人の首をころがし、まるで無警察の状態になつた時であつた。幕府側でも、何か之に對抗する勢力を作らねばならぬと考へてゐる時に、清河が浪人組を鳩合し、京都に乗り込まうといふ提案をしたから、板倉周防守が大いに乗りかゝつたものである。

清河の手で集つた浪人の中には、上州あたりのナラズ者もあり、甘く行けば旗本の株が貰へる位の考へで、ゾロ／＼ついて來たまでの事、清河の肚なんか、固より知る者はない。新らたに幕府が徴した浪人組だといふので、之を「新徴組」と命じ、清河が隊長格で、將軍警

固といふ名目をつけて、直接京都に乗り込んだ。

京都に著くと清河は新徳寺の本營に二百三十人ばかりの同勢を集めて、さて

「我々は天朝の勅を奉じてこれから攘夷の一番槍をやるんだ。不平なら今の中に脱退しろ」と、意外の本心を打開け、褒文句で脅しつけたには、一同吃驚仰天したが、清河の威勢に押されて誰一人反對を唱へ得る者がなかつたといふ。

近藤勇、土方歳三、芹澤鴨などの連中が、ブツ／＼云ひ出して別に一派を爲した。この十三四人の者が「新撰組」を作つた。「新徴組」から更らに撰み出したといふので、「新撰組」と名づけたものだ。これは文久三年三月のことであつた。

清河は百二十三人の同志を引きつけて、木曾路を下つて江戸に歸り、ゾロ／＼諸方から集まつた浪人を合して三百四五十人もの同勢になり、「新徴組」の威容が出来上つた。

幕府の命令で浪人共を狩り集めておきながら、清河はまるで之を逆用して、横濱あたりに繰り出して夷人館やら公使館やら、焼打をして火を挙げやうといふのだから堪らない。

まるで火の玉を轉がしたやうなもので、危なくて仕様がな。板倉が清河を殺しにかゝつ

たのは之が爲だ。

しかし清河の考は何も幕府の寢首を搔かうとしたのではない。彼の考へは、西國の浪人共が攘夷々々と迫つてくる。それを壓へつけようとするから天下が亂れるのだ。向ふで振り廻して来た刀を此方に頂戴して、幕府が攘夷の先手を打てば、天朝の名義も立ち、幕府の威力も具はり、浪人の志も達せられるといふもの、一劍の任、よく亂麻を斷つことが出来る。

といふに存したのだ。これ丈の妙案を出したのは、流石に清河八郎、山嶺一抹の雲翳を見て、早くも雨の到るを知るの秘機を捉らへてゐる。

### 十一 斗牛を買ぬく氣魄

幕府は攘夷の勅を受けて、いよく攘夷の期限までも定めたものだが、もとくやる氣がないのだから、とんと氣乗りがしない。

元來、何時幾日から攘夷をやりますといふて、期日を定めるのも可笑な話だ。

大掃除か何かなら、何月何日と決めるといふこともあるが、戦争をするのに「来る日曜日午前何時より……」と張り札をするものはあるまい。

理由があれば直ぐに宣戦の布告をして、ズドンと一發お見舞ひ申し上げさへすればそれでよろしい話、それを來る何月何日式をやるのは、やる氣がない證據だ。

そこで血氣の士は氣が氣ではない。清河八郎もその氣が氣でない一人で、幕府なんかあてにならぬから、一つ我々浪士でやつつけてしまへ……といふので文久三年の三月に京都を發して同二十八日に江戸についたものである。

清河が私かに軍器や軍資を調達してゐると、幕府の役人がそれに眼をつけた。

頃しも四月の十三日の夜更けのことだ。清河は此の日麻布の上ノ山藩の藩邸に出掛けて居つた。これはかねて知り合ひの上ノ山藩士金子與三郎に招かれて、御馳走になつてゐたものである。

ブラリと藩邸を立ち出で、清河が、一ノ橋の邊にさしかつたところ、暗の中から五六人の壯士が現はれて、抜き打ちに切つてかゝつた。

清河も劍客だが、酔つてゐたのと不意打ちを食つたのと、加ふるに多数に取り巻かれたので、とうとう不覺の死を遂げてしまつた。

その時の對手は例の佐々木只三郎の一手で、逸見又四郎、久保田千太郎、中山周助、高久安次郎、家永等の連中で、佐々木は清河を打つた爲めに、俄かに有名となつた。  
清河の一生は、さして人目に觸るゝやうなものもなかつたが、彼れの氣魄は、確かに斗牛を貫ぬく底のものがあつた。

文久二年ごろ、同志の松村大成と大いに飲んで、「告天神」と題する詩を詠じたことがあつた。その詩は、

天有日月。  
地有天子。  
大義既定。  
名分自起。  
何者奸賊。

售國醜夷。  
乃殲渠魁。  
復我神威。  
斯誓致身。  
募草莽士。  
願垂靈德。  
成功若揆。

といふのだが、暗殺當時の清河の心懷を、そのまゝに言ひ現はしてゐるやうな氣がする。清河の著述の中で「清中記事」なんぞは、なか／＼大部のものだが、立派な維新史料であると共に、又た文庫としても優れたものである。

八郎は清河村の百姓の子だ。彼れが平生「芻蕘子」と稱した所以はこゝにあるのだ。村名をとつて姓とし、自から稱して清河八郎といつた、彼れの心の清澄を知るべきである。古へより英雄豪傑の士は、草ッ原から生れ、絹布の布團の中からは生れぬものだ。この邊

横井小楠

によく氣をつけてかゝらなければならぬ。

欠

# 欠

さず匡收)

と認めてあるのだ。

これによると、小楠は先づ何よりも「獨立國家」といふものゝ樹立が必要であることを絶叫してゐるのだ。

そしてその國家の獨立といふことは「國論を明かにす」といつてゐるのは、國策の大方針を決せよといふのだ。

國論といふものには内外の別があるといつてゐるが、これは内政の外交といふものが國論の一大方針で、これを混同しないやうに、明瞭にしてかゝらなければ、國論は明らかになり得ないといふのだ。

第四には皇室と幕府といふものを尊奉せよといふのだが、これに加へてある但し書きといふものが、流石に純理論者の言たるに耻ない。

皇室でも幕府でも、尊重はせんければならぬが、幕府などは理が非でも尊奉せよといふのではない。幕府の政治にも、理ばかりはないのだから、若し非なることがあれば、進んで之

れを匡さなければならぬ、理が非でも押し通さうとすることのいゝことでないと同じやうに理が非でも服従するといふこともよくない。悪いことはどこまでも匡さんければならぬといふのだ。

序だから元治元年の正月に時の將軍家茂が二度目の上洛があつた折に、恰度在京中であつた松平春嶽に建言した「國是十二條」といふものがあるから、これを次に掲げて見よう。

國是十二條

- 一、不關天下之治亂、一國以獨立爲本。
- 自然の天理に則り、自然の人事を盡し、利害得喪、一切度外に付す、此の大條理明なれば、吉凶禍福、凡そ外事の變態人心を動すに足らず。其理に隨て順應之信義をして、天下に明かならん事を欲す。
- 一、尊天朝。敬幕府。
- 誠心奉戴。非心を正し非政を匡し、必ず皇國をして治平ならんことを欲す。
- 一、正風俗。

風俗の正しからざる法制禁令固より廢す可からずと雖も終には是れ末政數ふるに足らず。君臣一徳、治教明なれば風俗自然に正に歸す。所謂民免而無耻且格何等の道理ぞ。人をして感動せしむ。

- 一、舉賢才。退不肖。
- 一、開言路。通上下之情。
- 一、興學校。
- 唐虞三代の大道を明にし、推て西洋藝術の課に及ぼす、其要は人君躬行心得に發して觀感の化に本づく。
- 一、仁士民。
- 一、信賞必罰。
- 一、富國。
- 一、強兵。
- 一、親列藩。

凡そ彼に嫌疑あらば、分明に正言し、理あれば止む。改むれば止む。或は欺に其の道を以てすれば止む。孟子葛伯仇餉の言、其理甚だ分明なり。

一、交外國。

と認めてゐるのだ。意見の大本は王道、その策するところは天地の大道に基づいてゐる。

### 七 小楠の酒の呑みつぶり

小楠はひどい酒好きで名うての大酒家であつたさうだ。酒を呑むと酔ふ……これは當り前の話だが、小楠が酔ふと、

「ヤッ！」

と氣合ひを掛けるから、どうしたのかと思ふて見ると、どうだ、大刀を引き抜いて振り廻してゐるのではないか。

門人達は驚ろくまいことか、皆んな青くなつてしまつて、酔も何も何處へか飛んで行つて「先生々々、お静かに……」

といつて制したつて、それを耳に入れるやうな薄志弱行の先生ではない。

平生が平生だから、門人衆はビク／＼してゐる。それに酒を飲んでゐる。更らにその上に少々醗酌とお出でになつてゐるので、その大先生に大ダンピラを振り廻はされた日には——サア事だ。

何事ぞ花見る人の長刀

どころの騒ぎぢやない。

「元來近ごろの青二才どもは氣が小さくて困る。日本なんてものは、世界の豆ツブだぞ……」門人はお互に目をくばりながら安全地帯に身を退いて、

「はい、御尤で……」

「解つたか！」

「解りました」

「ヤッ！」

と雷光がきらめく、といふやうな譯で、かうなると門人達は青くなつてへたばつてしまつ



たものだ。

流石は小楠だ。治にゐて亂を忘れず。酔つて心法の訓練を興へるところは考へたものだ。小楠がある時、宮本武藏のことを批評したことがある。その言葉に、

『宮本武藏が、我が細川家に聘せられて、賓師の禮を受けて武道の師範をやつた。その時の武藏の教授の方法は、年がら年中、チャン／＼バラ／＼ばかりはやつてをらん。

武藝といふものは修身齊家治國平天下の本意を極むるものぢやといふところから、心の訓練といふことを主としてやつたものだ。

しかし又たさういふ心法といふ方にばかり凝つてゐると、實際の場合に臨んで臨機應變の手段が出来ない、恰度禪坊主のやうなもので、坐禪をしてばかりゐて、觀法をやつてゐると、得て空埋空手に陥いつてしまふのだ。

だから武士といふものは、何時何處から切り込んで來られても、直に體を變はして、これに應ずる實地の工夫がなくてはならない、といふので、木太刀を以つて道場で稽古をするのは一ト月に六回ときめて、その外は往來を歩いてゐるやうが、寝てゐる時であらうが、友

人同志で話をしてゐる時であらうが、いきなり、

「ヤッ！」

といつて抜き打ちに切つてかゝる。これをふせぐ、とまづかういふ練習をやつたものだ。

流石は劍聖といはるゝ武藏だけのものはある……」

といつたものだ、小楠が酔つ拂つて、

「ヤッ！」

とやるのも、この呼吸かも知れない。

### 八 越前藩の賓師

小楠はどこから見ても王者の師といふ格だ。これを古聖に比較すると、孔子といふ型ではなく、孟子の型だ。

「我が道一以つて之れを貫ぬく、曰く仁」

「夫子の道は忠恕のみ」

といふやうな、孔子の仁或ひは徳といふ大本願よりも、孟子が義を加へた、才氣の方に似てゐる。

神知靈覺湧和泉。

不用作爲付自然。

前世當世更後世。

貫通三世對星天。

などといふところが、才氣煥發の風手を思はせるのだ。

小楠が熊本にゐるころ、嘉永二年のころのことだ。越前藩士の三寺三作といふ人が来て、しばらく門下に學んだことがある。

三寺が何でこんなところへ来たかといふと、藩主の松平春嶽の命令で以つて、諸方を遊歴して、賢人を求めて歩いてゐたのだ。

三寺が京都に出て、當時の大學者梁川星巖の下に行つて、

「拙者此の度の旅行は外でもござらぬ。實は藩主の命を以つて天下の師たる人物を尋ねやう

と存するのでござるが」

といふと、星巖が、

「それならば肥後に横井小楠といふ御仁がある。この人は當代稀に見る人傑で、學問といひ識見といひ、斯人に及ぶものは、先づ少からう」

といふ話なので、三寺がわざわざ熊本に來た譯だ。

小楠に師事して見ると、聞きしに勝る傑物だから、半年ばかりも教へを受けて國に歸り、藩公に復命したものだ。

その中に小楠が上國を遊覽するといふことになつて、段々と上つて名古屋から北國路に入り、越前に入つた時に、藩學の儒員であつた吉田東篁に會つて、いよくその器略學問に服した。

この時は春嶽はまだ小楠に逢はなかつたものだから、嘉永五年になつて、家臣に命じて小楠に藩學の改正意見を問はしめたものだ。

「學校問答録」といふ建白書は、この時に小楠が春嶽に上つたもので、これによつて學制

を改革して、盛んに人材を養成したものだ。

春嶽もかういふところから、小楠を聘しようといふ考へが出て、家臣村田氏壽といふ者に命を含めて、小楠に遺はした。

愚なる心にそゝけひらけたる

君が誠を春雨にして

といふ和歌を春嶽が贈つたのはこの時のことだ。

「忠臣は二君に仕へず」

といふ論據からして、小楠が春嶽に仕へようとするのを批難するものもあつたが、小楠はそんなことに頓着するやうな、尻の穴の小さい男ではない、日本全國どころか、世界を頭の中にもまるめ込んでる先生だから、サツサと氣の向いた方へ出掛けて行つた。

小楠が越前にゐたのは、一二年ぐらゐに過ぎなかつたが、橋本左内だの由利公正なんどいふ才物がその下から出て來た。

由利公正などは、殊に小楠の經濟的方面の才能を學んだのであつた。

### 九 小楠の楠公評

小楠が或る時、こんなことをいつた。

「拙者を任用して、思ふまゝな仕事をさせるといふならば、先づ何だぞ。拙者はアメリカに渡つて條約をとり決め、第一戦争なんといふツマらぬ眞似をすることをやめさせる。それからヨーロッパに乗り込んでイギリスだのドイツだの、フランスなどを廻つて、世界中天理公道に基いて、有無相通するの大道をとりきめて、戦争廢止を約束して來る」

といつたものだ。世界平和、人類平等論で、世界に乗り出さうといふ人間が、我が幕末にゐたかと思ふと、ゾツとする。

安政五年の十二月といふ寒い最中に、小楠が越前の雪の中から熊本へ歸らうとする時のことだ。

横井の從者としてついでついでのが河瀬典次郎、竹岐律次郎の二人だ。それに越前藩士の中で、由利公正と平瀬儀作、榊原幸八の三人がお伴をした。

「實に感慨無量でありましたよ」  
「ハハア、サテどんな風に感慨無量だったのぢや」  
「されば、私は楠公の墓の前に立つて、一體楠公といふ人はあれほどの大忠臣であり、兵家として雄才がありながら、どうしてあんな目に逢ふやうになつたのであらうか……と實に感慨に堪へませんでした。さう思ふて來るとあの墓の前が動けなくなりまして楠公が自分の前にゐられるやうな氣がいたし、何とか相談して見たいやうに思はれて、立ち去ることが出来ませんでした」  
「いつたところが、小楠は、その話を聞きながら、フト心づいたやうに、  
「おぬしはさう思ふたか。拙者もさういふ氣がするのだ。惜しいかな規模がチト小さかつたワイ……残念のことだ……」  
「これ他言してはならぬゾ……」  
と戒められたさうだ。

由利等がついて行つたのは、小楠先生のお見送りといふばかりではなく、長崎に行つて海外貿易や交通状態をしらべるつもりだつたので、恰度小楠の歸國といふよい折が來たので、一緒にお伴をしたのだ。  
由利は元來酒のみではなかつたのだが、この少年をとくく大酒呑みにしてしまふたのは小楠で、道中、盛んに由利をつかまへて飲ましたものらしい。大阪から船を出して明石の浦に泊つた時に、由利があゝ有名な湊川の舊蹟を探ぐらうといふので、楠公の墓に參詣して歸つて來た。  
すると小楠が、  
「オイ三岡、お前は今日は楠公の墓に詣つて來たと申すが、何ぞ思ひ當ることでもあつたのか……」  
と聞いた、三岡といふのは由利の幼姓で、當時は三岡八郎といつたものだ。由利公正といふのは御一新後に改めたものだ。由利といふのは、三岡の舊姓である。  
由利が答へていふには、

楠公を評して「惜むらくは規模些か小なり」といつた、小楠の評言、わからつしやるか。

### 十 王者の師たる風格

元田永孚は小楠の門下中の逸才だ。逸才といふよりも出藍といった方が、更らに適切を覺ゆる。

元田は明治大帝の師で、君徳を大成し奉つた、聖人といつてもよいくらゐる人だ。岩倉友山をして「明治第一の功臣なり」と評せしめたほどの人物で、學問といひ人品といひ、徳望といひ見識といひ、理想の帝王の師であつた。

この元田が初めて小楠の門に入つたのは二十の折だつたといふから、小楠が二十九で、血氣盛りの最中だ。

元田がかういふことをいつとる。

「小楠先生は時務の人にあらす帝王の師たる人だ」  
それを小楠が聞いて、

「元田がいふやうにわしは執政の局に當る人間ぢやないよ」といつたさうだ。

横井に時務の才が無かつたのではないが、それよりも「王者の師」としての風格を、多分に備へてゐた。春嶽に聘せられて、講釋をしてゐる堂々たる態度を見ると、王者の師として申し分はない。

小楠が平生自分の好きな人物を擧げるのを見ると、支那では先づ三代以後、諸葛孔明と程明道だ。

それから外國では、アメリカ建國の偉人ワシントンが大好きであつた。堯舜以後の第一人者だと褒めてゐる。

日本では平重盛、楠木正行、學問では熊澤蕃山を推したものだ。横井が「小楠」と號したのは小楠公を追慕してつけたものだ。

孔明、程明道、ワシントン、平重盛、小楠公、熊澤蕃山といふ先生方を一つ臼の中に叩き込んで、つき上げて見ると、そこに横井小楠といふ人物が、臚ろけに出て來るやうな氣が

する。

參與になつてから、小楠が起稿したものに「天言」といふ一書があるさうだ。これは未完稿のまゝとなつて、刺客の手に斃れてしまつたが、その「天言」といふ書は、その名の示すやうに、小楠が畢生の心血を濺いで君徳の養成完達について稿したものだといふ。

どういふことを書いたものか、巷間に傳はらぬから知る由もないが、恐らく元田が帝王の師となつて、明治大帝に進講し奉つた大方針といふものが、必らずや、この天言の要旨ではあるまいか。

元田が小楠を評していつた言葉に、

「小楠先生の文字の俊逸なるは、その言論の爽快なるに若かず。その言論の爽快なるは又たその志操の超絶なるに若かず」

といつてゐる。流石は師弟の間だ。僅かに數言の間に小楠の面目を道破しつくしてゐる。

小楠の詩に、

披書見古人。

反思志不高。

前賢直自期。

磨礪何厭勞。

汗血驚鞭影。

奔帆截雪濤。

消除經營心。

超達即人豪。

といふ感懐の一首がある。かくいふ人豪、これ即ち小楠先生である。



一 西の海、東の空

幕末勤皇僧として名ある者に二人ある。一人は成就院月照で、他の一人は周防の妙圓寺の月性である。二人とも音が同じだから、時々間違が起る。

男兒立志出郷關。

學若不成死不歸。

埋骨何期墳墓地。

人間到處有青山。

學生が詩吟に聞きなれた『出郷關』の詩は、月性の詩で、十五歳の時の作だ。彼は自ら清狂と號し、脾大且つ氣豪なる上に常に國防の危うきを説いたので、一世彼を呼ぶに『國防僧』を以てしたくらるだ。

月照は洛東清水寺成就院の僧で、月性の豪快にして、鯨が遠洋で潮を吐くやうな勢ひに比し、清瘦白鶴の野に遊ぶやうな風があつた。



慷慨家で、勤皇の志に篤かつたことは申すまでもないが、平生歌道に鍛錬したので、月性が詩人であるのに對し、月照は歌人として名高かつた。

弓矢とる身にはあらねど一筋に

立てし心の末はかはらじ

と詠じて、かつてその志のほどを示したこともある。身は鎧衣桑門にあるの身でも、君國に報ずるの至誠は武に劣らぬと申すのだ。

その昔、鏡月坊が、

勅なれば身をば寄せてき物部の

八十氏川の瀬には立たねど

といつたのと同工異曲だ。

坊さんでも、百姓でも、お医者さんでも、乃至は巾幗の婦人でも日本人に變りはムらぬ。

イザといふ時には、悉く勤皇の誠を表はすところに日本の譽れがあると申すものだ。

弟の信海坊も、月照に劣らぬ勤皇心のあつた人で、兄の後をうけて成就院を繼ぎ、紫衣を

ゆるされた程の人だ。

盛んに攘夷の祈願をしてゐるといふことが分つて、たうとう幕吏に捕へられて獄に投ぜられた。

安政六年三月十八日に、此の人は獄中で病死した。

西の海東の空とかはれども

こゝろはおなじ君が世の爲め

との辭世を残して死んだが、『西の海』とは兄月照が前年の十一月十五日、薩海に入水したことをいふのであるが、東西處を異にして死するも、君國に報ずるの赤誠に至つては、毫も異なるところがないといふのだ。立派な心だ。

## 二 赤心の清僧

月照といへば、直ぐに西郷を思ひ、西郷といへば、直ぐに月照を思ひ出す。一代の俊傑と勤皇僧とが、月明の薩摩灣に身を投じた、あの劇的シーンが、人心に深い印象を與へたもの

だらうが、西郷と月照といふものは、まるで違つた性格の持ち主でもあり、境遇も違つて居つたものだ。

第一年も大分違つて居つた。月照は文化十年の生れだから、西郷の文政十年に比べると十四年もの年上だ。安政五年に、兩人が相抱いて投海した時には、月照が四十六で、西郷が三十二の若盛りの時のことだ。

元來、月照といふ名は、安政五年の秋に、薩摩に逃ける時に變名したもので、元は忍向と申して居つたものだ。今では月照で通つてゐるが、そのころには皆な忍向と呼んだものだ。先達でも月照の書だといつて持つて來たものを見ると、安政五年以前のものに、月照と書いてあつたので、その偽筆たることがバレて了つたといふ話だが、元來偽筆なんかする奴は心が曲つてゐるから、どこかでバケの皮が現はれる。

月照は玉井宗江といふ人の子で、彼れが十五の歳に、成就院藏海といふ僧の下に入つて頭を圓めて、中將房忍鎧といつたものだ。天保六年の五月の十二日に蘇海和尚の後繼ぎとなつて、成就院の住職となつた。この時が

月照二十三歳の折りだつた。

それからして弘化三年の暮に、山内寶性院の住職をも兼ねることになり、嘉永二年に忍向と改めたのだ。

月照の弟といふのが、矢張り僧籍に入つて信海といつて居つた。月照は佛サマの前でお經を讀んだり、死人に引導を渡すばかりで一生を終る人ぢやないから、自身の後を弟の信海坊に譲つてしまつて、それから諸國遊歴の客となつて、雨風にさらされたものだ。

西行は人生を果敢なで世捨人になつたのだが、月照のは西行とは違つて、王政復古の大志願を抱いて、ひそかに國事に奔走する爲めに、諸國遍歴の旅僧となつたのだ。これが安政元年の二月のことだ。

豊後の小河一敏といふ勤皇家の書いた『明烏』といふ本に書いてあるところによると

『忍向といへる僧は、勤王の志篤く、青蓮院宮及び近衛公の御内命を受けて、謀りける事ども多かりけるに、午年の秋、御老中間部下總守殿上洛にて、王家に心をよせたる戦士は、悉く捕へて關東に下す時、忍向も捕へらるべき勢に迫る折から……』

とあつて、青蓮院宮、近衛家に關係のあつたことを書いてゐるのだ。

月照が近衛家の知遇を得たのは、諸國遍歴に出た、その翌年の安政二年三月のことだといふ。青蓮院宮に出入するやうになつたのは、何時ごろよりのことだか詳しくは存ぜないが近衛家に出入するやうになつたのと、あまり大した相違もないころからのことだらう。

高臺寺春光院に居つたり、長樂寺云云院に住んだり、歌の中山清閑寺に寓したり、東福寺靈雲院に宿つたり、水の流れの行くにまかせて行き、止まるにまかせて止まり、その間に赤き心を紅葉の色に照りはえて居つたものだ。

### 三 西郷と月照

月照と南洲とが相抱いて薩海に投じたといふ事件は、人の心をひどく刺戟するものと見える。もう五六年にもなるが、ある役人が来て、わしにこんなことを聞いたことがある。

『どうも私にわからんのは西郷の心事です。あれほどの重大な責任を負ふてゐる人間、維新

の立役者である人間である西郷が、どうして月照なんぞと死んだのでせうか。どうも私に分りません』

といふ。それは西郷があまり輕卒ぢやないかといふ口吻であつた。

その時、成る程利害得失ばかり見てゐる現代人には、こんな風に考へられるものかと、碌に返事もしなかつた。

ところがこの一兩年は、大へんな西郷ばやりの時代となつて來た、映畫にもなれば芝居でもやる。お祭りまでされるといふ繁昌だが、そこでまた西郷月照投海の疑問が出て來たやうだ。

鹿兒島のサル智識ある人からこんなことをいふて來つた。

『自分は多年西郷と月照とが一緒に死ぬなんて事が、どうも腑に落ち兼ねて居つた。ところで此のころ古老の話に、あれは西郷が月照をだまして一度海に投じ、海中で月照を絞め殺したものだ。だから月照は死んで西郷は生き返つたのだと聞いて初めて多年の疑問が解けました』

これは西郷をあまり大人物に考へすぎた結果、月照を小さく見て、百萬ポンドの金塊と穴アキ五錢銅貨とを一緒にしては大損だといふやうな、人間の目方をカン／＼で秤るやうな見方をしたものだ。

あまり莫迦氣な話と思つて居ると、又もかういふ話をするものが出て来た。

『西郷が月照を海の底で絞め殺したといふのはどうも本當らしい。その事は荒尾精がいつて居つた』

荒尾の直話として傳へて来たものだ。荒尾は西郷について居つた人間であるから、この人の直話だとすると、サウ無下には捨てられぬが、話はまるで理に落ちない。

さてかういふ話といふものは西郷サンを偉い人物に見て、月照なんぞと一緒に死なす事には惜しいといふやうな感情、或ひは勘定から出て来るのだがこれは飛んでもない間違ひだ。

西郷が若し月照ををびき出して、水の底で暗打ちをくらわしたものだとなると、この事一つで西郷の一生は臺なしに叩きこわされてしまふ。

第一嘘をいふ人間に大人物は一人もない。一時は偉く思はるかも知れないが、時がたつと

そんな奴は直ぐに化の皮が現はれるものだ。

西郷の一生が今日まで人の崇敬の標的となつてゐる譯は、アノ天のやうな心と、偽りのない眞實があつたからだ。それをとつてしまへば、西郷は三文の價値もない。

一たい月照と西郷とが、どうして九州の果てまで落ちて来たのか、西郷と月照との交りはどんなであつたか、その邊から少し糸口をほぐして来なければ、薩海投水の眞相はわからない。彼等は決して借金につまつて死んだのでもなければ、失職者となつて食へなくなつたのでもない……………。

#### 四 一諾千金の西郷

抑々西郷と月照とが知り合ひになつたのは、一たい何時ごろのことであつたか。今ま一寸思ひ合はせぬが、兎に角西郷が島津齊彬の先き走りで働らいてゐる時に、月照は近衛公の代理で王權の恢復につくして居つたこの時分から交遊が別まつたものであらう。

だからさして古いことではない。もとより安政二三年以後のことだらう。月照が西郷と入

海したのが安政五年の冬だから、兩人が交つたとしても兩三年のことに違ひない。  
尤も十年つき合つても腹の合はない友達もあるし、一目見た丈で百年の知己となるものもあるから、交際の長し短かして友達仲のよしあしを判するわけには参らぬ、西郷、月照なるといふ人達の交際になると、私事ではない、全く國家の爲めでの交りだから、一層その間柄は清らかなものだ。

ところで井伊大老のクーデターといふものがやつて来た。これがいはゆる安政 戊午の大獄となるので、まるで二百十日の暴風が吹きまくつたかのやうな騒ぎで、勤皇家なんていふ手合ひは片つ端からフン縛つてしまへといふ意氣込みだから、日本全國、之れが爲めに慄え上つたものだ。

勤皇家どころか、井伊は、その腹臣として京都に派して居つた長野主膳なんかと共謀して主上遷幸までをも企だてたと評判されたくらるだつた。

西郷も勿論江戸に居られなくなつて京都邊へブラついてゐるが月照は一層幕府が眼をつけて居つた。

日ごろお目をかけられてゐる青蓮院宮へかくれてゐたら、こゝまでは手が届くまいと思つたところが、どうして、遠慮會釋もなく、幕府の役人どもの魔手が、宮様の邸内までも及ぶといふ有様だつた。

近衛公の老女むら岡なんぞはヒドく月照の身の上を案じて、いろ／＼に世話もして見たが段々と危険が迫まつて来るばかりだ。

そのころ薩摩の山伏で、日高存龍院といふのが入京して来たのだが、日ごろ近衛家に入入のものだから、久々で近衛公の御機嫌を伺ふと、公はこれはよい折だと、月照の身の上を存龍院に相談したものだ。

兎に角、若し月照が薩摩へ下るやうなことがあれば、その時はお前からも、何とか薩摩の政府へ取りなして、よろしくかくまつて貰ひ度いと頼み込んだものだ。

存龍院は公のお頼みもあるので、その後間もなく薩摩へ歸つて、事の次第を政府へ申し込んだといふが、この山伏があまり爲にならかつたとも申してゐる。

そんな都合だから、近衛公も、月照を京都に置くことは、いよく危険になつたので、そ

こで西郷を召して、  
『月照を頼む』  
と、くれぐれも御相談があつたものだ。  
その時に西郷が、

『ようがす、承知いたしました』  
と返詞をして、さて月照を伴ふて西下する身となつた。  
この『ようがす』の一言に西郷の命がかゝつてゐるのだ。

### 五 近衛忠熈公と月照

かようにまで幕府の追及が厳しくなつて来ては、とても遁れつゝはない。どうせ捕へらるゝものなら、こちらから男らしく名乗つて出て、有りつたけのことをいつて見よう。  
とかう月照は最初に考へたものだ。  
自分の身を隠す爲めに、いろ／＼人さまに御迷惑をかけるのを、心から相済まんと考へた

ものだらう。  
で或る時月照が近衛公に出でしみるゝとした句調で語り出した。  
『考へて見ますれば、つまらぬ私に、いろ／＼と御厄介をかけました。いつかは御恩を報ずる時もと、思はぬ日とはありませんでしたが、さても世の中ほど淺ましいものはありませんでした』

月照はいつになく、しめり込んでゐる。  
『君の爲め、國の爲めにと嘆けばこそ、かくは法衣を雨に濡らし、風にさらして、正義を天下に伸べんとするのでありますが、却つて幕府に諱れられ、おのが影さへ、落すに地なき今日となり果てゝは私の命もやがて終りに近づいたと存じます。利は固より名もない貧僧でござりまするから、何日何時、草葉の露と消え果てゝも、少しも惜しい命とは存じませぬ。志だに千古に耻ぢないものがござれば、必らずや群雄後に興り、王政の世にかへる時もござらう。私はこゝで潔よく縛に就き、幕吏と法廷に相見えて、赤心のほどを披瀝いたし、その上で心残りなく死に就きたいものでござる……』

月照も、かう考へるまでには、よく／＼思ひこらしたものに相違あるまい。  
四件を聞いて近衛公は、

「まだ／＼左程迫まつたものでもあるまい。死は易く生は難しだ。先づ隠れる丈は隠れ、逃れる丈は逃れて見て、さてその上の覺悟だ」

且つは慰め、且つは元氣をつけて、月照をば一先づ奈良へ落ちのばせることになつた。

こゝで南洲が近衛公から月照を引き受けて來たのだが、人間のあさました。これが生別にして兼ねて死別となるのは近衛公も月照も、夢にも思つてゐなかつたことだらう。

況んや西郷が、預り物の月照と、薩摩の海で心中しようなどは、かけても思ひ及ばなかつたに相違ない。

だから人間といふものほど分らぬものはない。

いくら修業をして、名僧智識となつて、世の中を大悟したからといつて、結局それは世の中といふものを悟つた丈けのことで、明日のことさへ、解からう筈はない。

相約 投瀧 無後 先

### 豈圖波上再生縁。

で、世の中の事といふものは何一つ豈に圖らんやでないものはない。

借金に困まつて夜道を歩いて居つたら、ガマ口を拾つた。開いて見たら金百萬圓あつた。

こんな豈に圖らんや結構だが大凡そ豈に圖らんやは始末のわるい方にくつゝいて來るやうだ。アネ圖らんや妹然らんや。アニ圖らんや弟然らんや。何の事だか解らぬのが人生だ。

### 六 竹田街道の危難

扱て。月照をお預り申した西郷は頃しも安政六年、秋は九月の九日、重陽節句の夜も深々と更け渡つたところだ。先づは御幸町三條上ル竹原好兵衛といふ仁の宿屋に泊まつた。

十日は朝のしら／＼と明けそむるころ、一行は南都へとさして向つた。月照坊は轎の中にあつて人目を忍び、表て向きは薩摩のサル貴僧が京に上つての歸り途といふ觸れ出した。

西郷ドンは直ぐに轎の傍について、例の巨大なる體軀をドシリ／＼と運んで行く。轎より先きに立つて、やゝ數十歩も離れて歩くのが有村俊齋。轎のうしろから、心配さうな

顔をして、ヨチ／＼ついて行くのが、月照の僕重助である。

箱根の山から三島に下る雲助ならば、それこそ大虚空を飛んで、ハツといふ間に一萬五千里ぐらゐは往復するかも知れぬが、京都の轎屋とくると、土地柄頗ぶる悠長なものだ。

格堂の句ではないが、  
蛇穴を出で、遅々たる行衛かな。

で、一行は気が気でないが、あまり急がして氣取られれば、それこそ大變だ。

心は矢竹にはやつても、顔には出さぬ。まだ星の見える空の下だから、人通りはないが、時に幕府の役人らしいのが、一人二人、行き過ぎながら、怪しげに見かへる。その度ごとに流石の西郷もヒヤリとしたものだ。

道を竹田街道にとつて、さる茶屋の邊まで来ると、何だかガヤ／＼と人聲がする。よくよく注意して見ると、幕府の捕吏らしいのが、二三十人も集まつてゐる様子だ。

さア、こゝへ來掛つて西郷も有村も、お互に顔見合はして困りはてた。  
勿論權道はない。一本街道だから、この前を通らない譯に行かない。通れば何とか訊問さ

れるに違ひない。

「サテ困つた」

と思つてゐる間に、轎屋は何にも知らないから、サツサと道をいそぐ。

茶店の前まで來たと思ふ時に西郷は何と思つたか、月照の乗つてゐる轎を、その人混みの中に、ドスンと下ろさしたものだ。

眼の玉を眞圓くして驚ろいてゐる俊齋をかへり見ながら、

「おハン、何チウこつちや、時刻をとり違へたと見えてえらい早出でこわしたのウ……」  
といひながら、天地も崩るゝ大笑ひ、

「ウハハ、、、、」

とやつたので、有村もやつと元氣が出た。

「さようでごわしたかのウ、先きは永いこつちや。先づゆる／＼と參らう」

その話しつブリが、眞に何氣ない有様であるから、これには幕府の役人どもも、すつかりしてやられたものと見える。



誰れ一人一行を見とがめるものもない。茶店の婆サンがくんで出す番茶などをすいり、平然たるものだ。  
それから婆サンが轎の中へもお茶をと思つて、  
「お茶召しませ」  
と出した時、籠の中から雪のやうな白い手が出た時には、流石の西郷もヒヤリ………としたさうである。

### 七 瀬戸内海を西へ

京都で危ないものが、奈良で安全であるわけがない。  
「奈良まで行つたら何とかなるであらう………」  
と思つて来たものゝ、京都と奈良では眼と鼻の間だ。  
伏見の船宿まで来ると、西郷は一まづ京都にかへり月照は俊齊に伴はれて大阪に下つた。當時吉井友實が大阪に居つたので、俊齋は早速之れに談判した。

「實は西郷と月照を預つて来たのだが、どうも此の邊にウロついてゐるのは劍呑だ。西郷ド  
ンと相談して、薩摩まで落さうといふことになつたのだが、西郷が京都から来るまで、何處  
ぞ、よい隠れ場はござるまいかのウ………」  
有村の相談を受けて、吉井が世話をして呉れたのが、幸助といふ、薩藩の上仲仕をしてゐた  
者の家だ。

こゝで有村も一度京都へ取つて返へし、所用を果さうといふので、月照を大阪において立  
ち返へることになつた。月照は、奈良までだといふので、ツイ着のみ着のまゝで、フラリと  
出て来たのだが、途中から様子が變つて、いよく九州の果て、薩摩の國まで落ちて行くと  
いふのでは、これは容易ではない。第一着代への一枚ぐらゐは用意しておかんければ相成ら  
ぬ。

有村が京都にかへるといふのに托して、月照は、成就院坊宮近藤正愼といふ人に手紙を寄  
せて、いろく〜と手まわりの品を取りよせた。  
さて西郷、有村は京都に歸つて来たものゝ、幕府の探索がえらい厳しい、自分の影法師に

さへ氣を置かねばならなくなつたので『これではいかぬ』といふので、西郷、有村、北條の三人が打ちつれて大阪へ下つて來たものだ。

そこでいよく月照をつれて鹿兒島へ逃げようといふので、九月二十四日、その日の早朝に小舟をやとつて土佐堀からこぎ出した。

その時の船の準備などは、一切吉井がしてくれたものであつたが、船が出ようとすると、捕卒らしいのが、怪しげな眼つきで、覘つてゐたのである。

實に危機一髪といふところで舟は出てしまつたが、吉井は氣が氣でないので、天保山沖まで土堤つゞきに歩いて、影ながら舟の安全を見送つたものだ。

舟の中では、月照は毎朝々々東天に向ひ、皇宮に兩手を合はして拜してゐたといふが、大阪を出る時の月照の歌に、

難波江や芦のさわりは繁くとも

なほ世の爲めに身をつくしてん

自分の身の境遇の如何にかゝわらず、勤皇の赤誠は、どこまでも月照の心にあつた。

東風を滿帆に孕んで、瀬戸内海を西に奔る舟足の早きを見ては、

追風の矢を射るごとく往く舟の

はやくもことを果してしかな

とも詠じてゐる。

いかばかりうきめ見るとも行末に

こゝろつくしの甲斐もあらなん

といつてゐるが、この西行は、何の甲斐もなかつた。

### 八 筑紫路の秋

月照一行の船が馬關についたのが、大阪を發して丁度一週間目で、十月一日であつた。

一行は一先づ上陸して白石正一郎の家に休んだ。この白石といふ人は馬關では有名の豪家で且つ勤皇家であつたので、海峡往來の有志者は、大がいに白石の厄介にならぬものはなかつた。

着いて見ると、丁度前日九月三十日に島津齊興侯が、こゝを渡つて薩摩へ行かれたといふ話だ。

西郷はその話を聴くと、直ぐその跡を追つて即日出立してしまつた。それは京都の多忙を話す必要もあり、且つ月照保護のお頼みもしようと考へたからだらう。

月照と有村と北條とは、一先づ白石家で一泊し、明くる十月二日に戸畑港に入り、三日にいよく筑前博多に着し、北條右門の家に身を潜めた。

筑前といへば、往昔太宰府のありしあとで、菅公の故事もあれば、元寇の勇ましい昔語りもある。

こゝまで来ればまづ安心と、月照は人々に案内されて白砂青松の間に歩を運んだ。

箱崎八幡宮には、畏くも『敵國降伏』の勅額が掛つて居る。

海濱を洗ふ波の音には、昔ながらの響きがあつて、今にも元兵十萬が、鬨をつくつて押しよせ来るかにも思はれるのだ。

月照の歌に

白波のよせしむかしは今もなほ  
忘れはせじな箱崎の神

又たこゝいふのもある。

行末はいかにかならん不知火の

筑紫の海にやすらしら波

こんな具合ひで、月照が博多に居つたのは、十日あまりにもなつたらうか、するとその中に馬關の白石から急使が来た。

急使の傳言では、南洲、月照兩人捕縛の爲めに、幕吏が下關に來たが、何でも直ぐに博多に向ふやうな様子だから、急いで鹿兒島へ逃けろ……といふ使ひだ。

そこで月照は又々旅装をととのへ、十月十七日博多を出たものゝ誰れも鹿兒島までついて行くものゝない、そこで平野次郎がこの事を聞いて、大へんに同情し、筑後川を下つて久留米に到り、柳川、小保、野間、阿久根と、泊りを重ねて鹿兒島についたのが、もはや初冬の風寒き十一月八日であつた。

年ふるも忘るべしやは不知火の

つくしにつくす人の心を

これは月照が平野に謝するの、心からなる三十一文字であつたのだ。

野間の關へ来た時には一寸風むきが怪しかつた。迂濶りするとトツつかまるところを、危ふく引きかへして、今度は船で阿久根へ廻つたのだ。

野間の關ゆるさで今宵さつま湯

しるべを波のうき枕かな

十一月といへば、もう眞白な霜だ。それをはるくと京都から逃げて来た月照が、とぼとぼと風に吹かれて行く。實に同情に値ひする。

霜むすぶ風は糸針ならねども

身を縫ふばかり寒けかりけり

かくしてやつと九州の南端、鹿兒島へ来たものゝ、こゝが又た安全地帯ではなかつたのだ。これより先きは最早や海だ。月照の運命がこゝで窮はまつたのは致し方もない。

九 薩摩も佐幕派の天下

浦安くけふは薩摩につきにけり

こゝろつくしの人をたよりにて

月照はやつとの思ひで、薩摩についたのだ。先づ日頃の知り合ひであるから、日高存龍院に投じて、そこで西郷とも面會し、身の行く末を相談したのであつた。

あまの舟人にはゆめな語りそよ

薩摩の瀬戸に我れわたり來と

都にて誰れかあはれと思ふらん

心つくしのはてにこすの身を

これほど草にも露にも心をおくやうになつた月照は哀れむべき僧であつたのだ。

西郷は俊齋と協つて、先づ島津齊興侯に請ひ、島津豊後にも説いて、何とか彼れの安全を保し與へたいと奔走したが、當時の薩摩藩が、佐幕黨の天下となつてゐた時だから、西郷の

要求は一つも容れられなかつたのだ。

月照の頼つてゐた存龍院といふのが、又た頼み甲斐のない男で、いつの間にもやら、月照が投じたことを藩廳へ内通したものだから、藩廳では直ぐさま、月照を旅館俵屋へ幽閉したものだ。

兎も角幕府の追求が厳しいので執政の島津豊後もどうすることも出来ない。そこで西郷を呼んで、

『御覽の通りの事状では、月照を薩摩に置くのは、却つて危険だ。足下は一先づ彼れを日向につれ、しばらく法華ヶ嶽に潜んで居つて貰ひたい。その中には何とかならう』との相談だ。

西郷が此の話を聞いた時に、

『これでは駄目だ』

と考へた。その譯は、藩廳で月照を助ける氣があるのなら何れも日向までやる必要はない。如何に幕府の追求がきびしいといつたところで隠す氣になればいくらでも場所はある。それ

を日向に行けといふのは、自分の藩で月照を捕へさせたのでは面目がないから、他國で、幕府の役人に引渡さうといふ肚にちがひない。

自分が月照をつれて日向に行くのは、彼れをあざむいて幕吏に引き渡すやうなものだ。西郷如何に窮するといへども、男を賣るやうな事は出来ない。

かう西郷が思つたから、立派に決心をつけ、旅裝束をした西郷が十一月十五日の夜深く、月照を俵屋に訪づれた。

どうも西郷のそぶりがおかしい。坐つたまゝ一言もいはずに黙つて眼ばかりパチクリさしてゐる。

月照は早くもそれを覺つたと見えて、

『平野サン、洵に失禮だがお茶を進じて下さらんか』

平野が承知して坐を立つて、歸つて來た時には、兩人は既に黙しておつた。

西郷はこれから日向へゆくといふこと丈けを月照に話したものと見える。投海の心事までは話さなかつた證左には、

舟人のこゝろつくしの波風の  
危うき中を漕ぎ出でにき  
とある歌でもわかる。  
一切は舟の上のことだ。

### 十 曇なき心の月

その晩、一緒に舟に乗つたのは、都合六人であつた。

西郷隆盛  
僧 月照  
平野國臣  
僕 重助  
藩吏 阪口  
同 高師

藩吏が同船してゐる上は、迂闊なことは話せない。眉秀で眼爛々たる平野が、

「幕府當今の措置、甚だ……」

と慷慨談に移らうとするのを

「今夜は何でござすのウ……さやう氣のつまるやうな話は止めて、浮世ばなしでもしようではござせんか」

と西郷が、いつにない酒肴の用意をして、一同をもてなした。

その中に月照は座を立つて船の上へのぼり、月かけに矢立をとつて、懐紙に歌を認めて立ちかへつて西郷に示した。それは先の「舟人の……」歌だ。今一首の歌は、

答ふべき限りはしらで不知火の

つくしにつくす人のこゝろに

といふのであつた。それを見た西郷は、

「いかにも」

と打うなづくのみだ。

やがて西郷と月照とは、袂をつらねて舷上に立つた。皓々たる十五夜の明月は、冲天に牙を返つてゐる。

西郷はおぼろにかすむ海岸の風景を指呼しつゝ、磯路の長汀曲浦、心岳寺の山門など、島津氏武門のほまれ、齊彬公ありし日の思ひ出なぞを語り出した。

西郷はたしかに舟に乗る時、日向に赴くと決した時に、早くも死を決してゐたであらうと思はれるが、それと月照に打明ける機会がなかつたのであらう。

そこで西郷は、月照とたつた二人になつて、船の上で語る機会を得た時、初めて秘中の心を月照に物語つたものと見える。

聞いて見れば月照とても、同じ思ひに違ひはない。身は桑門に入るといへども、心は夙に大君に捧けてゐる。二人は相抱いて黒潮のうづの中に投じた。

後に西郷の懐ろの中から出た月照の懐紙には、曇りなき心の月も薩摩鴻

沖のなる間にやがて入りゐる

と認めであり、又た他の一首には大君の爲には何か惜からん

薩摩の瀬戸に身は沈むとも

とあつた。この二首は、共に決死の辭世の歌だが、先の歌には「危うき中をこぎて出にき」とあつて、死ぬる心は少しも出でてゐない。出でゐないばかりか、多少の希望さへかゝつてゐる。

ザブンといふ水音に驚ろいて、先づ平野が舟の上に出て見ると最早兩人の影が見えない。平野は手早く脇差を抜いて帆綱を切つた。阪口は水棹を突き立て、おいて、やがて流るゝを漕ぎもどして見ると、相抱いた兩人の身體が波上に浮き上つて來た。

大急ぎで舟の上にあけ介抱をした結果、西郷は死中活を得たが月照は遂に甦らなかつた。

西郷は半月も物が言へず、死せる人の如くであつたが初めて口が利けた時には、たゞ「月照々々……」

と月照の名ばかり呼んでゐたといふ。

それから星落ち月沈んで十七年、月照の墓前に立ち、

頭ヲ回ラセバ十有餘年ノ夢。

空シク幽明ヲ隔テ、墓前ニ哭ス。

と悲しんだ西郷が、何で水の底で清僧を絞め殺すものか。

西郷と月照との因縁をたどり、西郷が近衛公に頼まれて、大丈夫一諾を興へ、之に殉じた任侠を察すれば、こんな傳説は一瞥の値ひもないが、それが疑問となるところに、世の中の移り變りといふものが見える。形ばかり見て心の尊さを知らぬ者には、いつでもこんな疑ひが起るものだ。

勝  
海  
舟



一 勝は絶代の智者

時に勢ひといふものがある。それだといつて、勢ひに乗ずるものは名を成し、勢ひに逆らふものは、自から振はないが、勢ひに乗ずると、乗せざるとによつて、人物の斤量には變はりはない。

禪林の句に「一人は順風に帆を張り、一人は逆流に楫を把る」といふ句があるが、幕末における勝海舟の立場を見ると、全くこの逆風に舵を把るの形がある。

「大厦の倒るゝや一木能く支へず」

とあるが、その倒れかゝつた大厦を全身の力を以つて支へたところは、何といつても勝海舟の偉さを思はねばならぬ。

「徳川を賣る者は海舟なり」

と、幕臣の中から罵しられもするが、「徳川を賣る」といふやうな不純な心で、あの江戸城開渡しといふやうな大仕事は出来ぬ。

勝さんは智謀の士であつたから、そこからいろんな噂も出るが、策略ばかりでは人心を服することは出来ぬ。

我輩は江戸城開渡しの大舞臺に立つた海舟の姿を見て、何とはなしにホロリとさせられるのだ。

一切萬事を我が身に引き受けて、世上の毀譽褒貶を、塵ほどにも念頭にかけて、皇國の生靈を救ひ、徳川家の面目をも立派に立て、やつた心情は、立派なものである。

慶喜さんも良い家來を持つたといはなければならぬ。持つべきものは良臣だ。

浅野内匠頭が、

「五萬三千石に過ぎた家來は大石ぢや」

といつて、いつも大石々々といつて寵愛したといふが、その大石があつてこそ、初めて判官の名譽が千古に傳はるのだから……。

慶喜が勝をどれほど寵愛したかは知らぬが、寵愛しようが、しまいが勝は慶喜の良臣だ。慶喜さんも、何ちらかといふと、頭の鋭い人間だ。勝に至つては絶代の智者だ。頭の鋭い

のと鋭いのが一緒になつたのだから、鋭敏の鉢合はせをしたやうなところもあるが、何にせよ、一人の勝海舟があつたといふことは、徳川の終りをして、少くとも脱線せしめずに済んでゐるのである。

榎本鎌次郎なんぞも、豪傑には相違ないが、函館五稜閣に立て籠つて、善戦したところは慥かに一方の將たるに恥ぢないが、それ丈けに戦つた明治政府に對し、後には任官して大臣になつたりするのよりは、勝が美事に降参して、靜に閑雲野鶴を友として、一生を送つた高風の方が、どれ丈け人品を高くするか分らぬ。

戦争でもさうだ。攻撃するよりは、退却する方が、どれほど六ヶ敷いかわからない。攻むる方なら、どんな凡倉大將でも、さしてボロを出さぬが、退却となると、古今の名將でなければ、上手には参らぬ。

議會などでもさうだ。雄辯家などといつて、人氣をとつてゐるものは、大がいに大臣になると一日も持ちこたへ出来ぬやうなもので、本當の勇氣は、退勢により、逆境によつて初めて現はれるものだ。

出逢はぬといふ知らせがあつた。そして西郷どんは、箱根の關も何でもないから、一擧して江戸に乗り込むつもりぢやといふ手紙ぢや。そこでおいどんは、これは大變ぢや、これは必度西郷が勝の計略にはまり込んでどえらい目に逢ふに違ひないと考へたのぢや。そこで急に人を出して、西郷の先き廻りをさして江戸の様子を探ぐらせたものでござつた。この時の心配といふものは、とても鳥羽伏見の戦争どころではなかつた。今ではそれも昔し話してござるかのウ……」

大久保は當年を想起して、感慨無量の面持ちだ。勝は容を改めて、口を開いた。

「いや御心配のほどは、お察し申し上げる。當時の拙者には、敢て關東に割據しようといふ考へはござらぬ。又た官軍に對して武者振ひをしようといふ功名もござらぬ。固より、徳川一家の社稷を存することのみに腐心した譯でもござらぬよ。幕府といつても、朝廷といつても、同じ日本人でござるからのウ。拙者當年の希望は、百萬無辜の生靈を殺さず、利害共に外國人の侵略を受けないうで、天下後世の爲めに、立派な國家の基礎を立てたいといふ外はな、公道大義のあるところに従がつて進退したまでとござるよ。その時、この西郷さんがご

## 二 西郷と大久保と勝

明治四年ごろであつたか、或る日大久保が、西郷と勝との兩人を呼んで御馳走をした。時に大久保は、杯を洗つて勝にさしながら、

「先づ一杯飲まつしやれ」

「これはく」

さしつさゝれつする間に、主客共に微酔を帯びていゝ氣持になつた。さて大久保がいふには「今日から思ふと、夢のやうな氣が致すが、お互に御一新の時には心配しましたなア。忘れもせぬ戊辰の二月ぢや。いよく官軍が東下しようとする時に、かういふ論が出ましたよ。それはナ勝さん、あんたが必度軍艦を率ゐて攝海に押し寄せ、灣口を封鎖して、海路の連絡を絶つぢやらうと、かういふ論ぢや。これは尤もぢやといふので、おいどんが伊知地、山田の兩人に丹波路を視察せしめて萬一の場合はこの方面から連絡をとるつもりでござつたよ。その中に大本營は駿州靜岡へ到着したといふ報道と一緒に、西郷どんから、敵兵には一人も

ざつてなア、大度量を示し情義並び至るの至誠を披瀝されたので、拙者はもう一言も出な  
なつたのぢや。徳川が恭順をしてゐるのに、當時若し官軍が理不盡に江戸城を攻めたらどう  
ぢや。百萬の生靈を苦しむばかりぢやない。王師の名は忽ちに消滅してしまつて、無名の  
戦さの爲めに、江戸をあけて焦土と化し去つたでござらう。そこを察して進軍を中止され  
のは、流石は西郷ドンの大卓見ぢやよ」  
勝も暫らくは當年の人となつて懷舊談を試み、夜の更くるのも知らなかつたといふ。

人間の事業は智慧ばかりでは出来ぬといふことを、この一場の會話の中でも察することが  
出来る。すべては至誠なのである。

### 三 勝の小楠南洲評

嘗て海舟が、かういふ話をしたことがある。

「御一新の前に自分が西國に参つた折に、先づ熊本に行つて、横井小楠に面會したところが  
どうも見上げた學者で、滔々として時務經綸の策を論ぜられた。その論鋒の鋭いことは、お

話にならぬ。自分はたゞ聞き手で、何にもいふことが出来ないくらゐるぢやつた」

横井平四郎といへば時務を知るの俊傑で。通り一べんの學者ではない。松平春嶽に聘せ  
られて、越前藩の政治顧問になつてゐたこともあるが、随分頭のすゝんだ學者であつた。

議會で尾崎が共和演説をやつたといふので、一時國賊呼ばりをされたこともあつたが、な  
かなか横井などは、夙の昔に共和政治論をやつてゐる。尤も横井の共和論は、王政共和論で  
毛唐などのひねくりだしたのとは、大分違つてゐるのだ。

そこで海舟がこの先覺的卓識家にブツつかつて、サンクに吹きまくられたものらしい。  
勝もなかく横井に劣らぬ議論家で、眼も光れば、頭も透つてゐる。それに口達者だから  
どうして、横井なんぞに負けるもんかとの肚で、ブツつかつたのだ。

それがいよく小楠に面すると、あの鋭利な論鋒で、息もつかせずやつたのだから、勝の  
頭にはひどくこたへたものと見える。

ところが今度は、西郷に逢つて見ると、まるで横井とは風が變つてゐる。  
西郷はこちらから何をいつてもたゞ、

「ハアハア……」

「左様でござすか……」

と肯づくのみで、とんと物をいはぬ。

横井に逢つて、大いに肚をきめて来た勝が、まるで見當が違つてしまつた。

いくら議論を吹つけても、たゞ西郷が聞いてゐるばかりだから、仕方なしに、今度は勝が議論をする役目になつてしまつた。

當時勝がどんなことをいつたか、幕末危局に對する卓見のありつたけを述べたのだらうがそれを聞いてゐる西郷が、感心したとも、せぬとも何ともいはぬ。勝はボカンとして、鳩が豆鐵砲を食つたやうな調子で歸つて来た。

後に勝さんが兩雄會見談の批評をしていふには、

「説法をするのと、させられるのでは、大分人間の段が違ふわい……」  
といつたさうだ。

勝が度々西郷と相見るに及んで、西郷の偉器たることは、その度ごとに勝の頭にコビりつ

いていつた。

後年の江戸開城の時に、兩雄會見して肝膽相照し、百萬の生靈を安んじたことは、實に近世史中の花ともいふべきものだ、あの時、一寸高輪で逢つたくらゐで兩雄がすぐに肝膽を照したのではない。

そのずつと以前から、勝は西郷の人品に服し、西郷は勝の人爲を推稱して居つた。

西郷が官軍の參謀として、トコトンヤレナで来たといふことを聞いて、勝は江戸からそれを眺めながら、

「これは話せる人間が来るわい」

とお待ち申し上げてゐたのだらう。

#### 四勝の三傑評

勝は切れ味のいい名劍のやうなものだ。それにくらべると西郷は、サヤばかりで中味がな  
い。空っぽである。

中味がないのは、心がないのではない。人を殺さぬ、心がチャンと納まつてゐるのだ。昔の話だが面白い話がある。あの無手勝流をのみ出した塚原ト傳に三人の子があつた。するとト傳が三人の子の武藝を試めて、一番よく出来たのに、その流儀の奥傳を譲らうと思つたのだ。

そこである一日のこと、ト傳先生は奥の座敷に端然として坐し、間の唐紙の上のカモシのところは一升櫛をあけて、唐紙を開けると、それが落ちる仕掛けをした。物好きな親爺があるものだが、子供の名を呼んで、召し寄せた。

最初に來たのが三男坊、襖を開けると一物は早くも天井から落下した。ハツと思ふ間に抜く手も見せず、一刀兩斷。一升櫛を眞二つにしてしまつた。頗ぶる鮮やかな手の内だつた。次が二男坊、落ちて來る櫛を一瞬の間に右の手を出して、掌の上にのせた。高が一升櫛ぢや刀にかけるほどのことはないと思つたのだらう。

すると三番に呼び出されたのが長男の甚六だ、彼れは目俊くも一升櫛のブラ下りを見出して先づ之れをとり下ろして、

「汝は座敷などに居る代物にあらず、臺所にまかり下りをれい……」

といつたかどうかは知らぬが、下女を呼んで持ち去らしめ、やをら襖を開いて兩手をつかへ「御父上、何ぞ御用でござりますか」

慇懃なる挨拶ぶりを見て、ト傳先生が、この甚六こそ、我が無手勝流の奥傳を傳ふべきものぢやと見込んだといふ話。

これは作者の作話か何かであらうが、面白い話だ。

海舟の人爲りを見てゐると、そのすばしいこと、丁度この抜き打ちに切つて捨てた三男坊に似てゐる。

西郷になつて見ると、手先の藝當ではない、心の働らきである。

勝の自筆の稿本中に、維新の三傑を評した一節がある。それを見ると、勝が西郷をどんな風に見てゐたかわかる。

「從古、爲邦家に大勳あるもの、令終を得しは甚だ稀也。維新の際、大事に任じ公議を決し、斷然不顧、其能に不矜、其功を不思、洪業成るに當て其瑣事は人に任じ、如忘

如不知者は、予於西郷氏視之。次之大久保氏、木戸氏あり、共に一世之雄、然りと云へども、西郷氏に比せば亦降る事數等、兩氏が爲す所、非常にして端倪すべからず。是以て竊に忌憚せられ、其説反つて諸官と不相合、西郷氏は不然、自ら人を評して云、彼は余に勝れり、亦予の不及所也と。絶て介意之事なし。其遠識大度、豈一世にして窺ひ知るべけん哉」

海舟の三傑評、大いに見るところがあると申さねばならぬ。

「西郷を知るもの、我れ一人」

と勝はよく人に語つたさうだが、西郷の一事一情を知るのいひではない。眞に西郷の心友は我れ一人のみといふのが、勝の言裏にふくまれたる意中だらう。

### 五 勝、西郷最初の見参

勝と西郷とが、初めて顔合はせをしたのは、元治元年九月十一日であつたといふ。「海舟日記」九月一日の條に、次のやうな一節がある。

「薩人大島吉之助(西郷)吉井幸助(友實)青山小三郎來訪云、征長の御議、紛々不決、關東御混雜、實に策の行はるべきなし。邦人紛擾再出せん歟。如何にして可ならんやと云。今天下危急日々相迫、一人も實意邦家に盡すものなし。上下大抵、私營小得、又嫌疑を避くる而已、如斯にて如何之互解せざらん哉云々」

勝の日記には、それ以上のことが認められてゐないが、當時西郷が大久保甲東に與へた書簡の中に勝との會見を報じてゐるものがあるが、それによつて見ると、西郷は長州征伐(第一回)に對して、將軍の親征を促がしてゐるやうである。

すると勝は、どこまでも幕府絶望論で、

「將軍家の親征など、とうてい出来た沙汰ではござらぬ。まア聞いて御覽なされ、幕府の内情はこの通りでござる」

といつて、勝は、幕府の腐敗から素亂から、殊に財政上の窮乏について、何の隠すところもなく、剔抉して、

「かやうな始末でござるによつて、とても將軍家の親征などは思ひもよらぬことである。よ

しんば親征になつて見たところで、決してその實はあがり申さぬ。却つて將軍の威令を墮すやうなものでござるよ」

勝は當時、不平、大不平の境地にあつたのだから、幕府に見切りをつけてるたのだから、「今日のやうに奸物が局に當つてゐては駄目ぢやなく」と匙を投げての話しつぶりであつた。

そこは西郷だ。

「奸物がゐるて困るなら、その奸物を掃除したらようござせう」  
勝はどこまでも捨て鉢である。

「奸物を掃除するのはお易い御用ぢやが、さてその奸物を掃除した後には誰れを用ゐるか、人物がないといふものは致し方もないものぢや」と投げた匙を拾はうとしないのだ。

「幕府に人物がないと仰せらるれば致し方もおかせん。さようなれば諸藩の力で周旋する外はござるまい」

西郷は、どこまでも現實を打開しようとする。

「諸藩の周旋でござるか、これも結構でござる。しかしいくら諸藩の周旋があつても、幕府に之れを受けつけるものがなくては、折角の周旋も、何の役にも立ち申すまい」

勝は見切りをつけた幕府に、どこまでいつても手のつけやうはないとしてゐる。その會見が兩雄相識の、抑々の最初であつたが、西郷はこの時の勝を評して、

「勝さんにはじめて面會仕つたところが、洵に早や驚ろき入つた人物ぢや。初めの間は少々叩いて見ようぐらゐに考へてゐたが、却々どうして、叩くどころか、こちらがトント頭を下けてしまつた。どれほど智略のある人やら、見透しの出来ぬ人で、英雄肌合の人でござつた。仕事の出来る點では佐久間象山以上でござせう。學問識見に到つては、佐久間は拔群のものでござるが、危局難局の現場に臨んでは、勝さん！と、ひどくほれ込んでしまつた」

といつてゐる。すぐに物込むところが西郷である。人のアラを捜して塵ツ端ほどの功名を立てようとするやうな、ケチな根性は毛頭ない。



六 江戸百萬の生死

伏見鳥羽で官軍と會桑の兵とがブツつかつたときいた時に、江戸にあつて勝が天を仰いで  
洪嘆したさうである。

何故に慶喜を死諫し、恭順を表しなかつたか、戈を逆にして王師に抗したのは、何とし  
ても徳川十五代の大概である。

泣いて見ても、嘆じて見ても、既に出来たことは、取り返へしがつかない。そこで、王師  
の東進をむかへて、途中で何とか慶喜恭順の眞意を傳へたいものだと思つた。

こゝでの苦心が、實は勝一生中の一大難關であつたのだ。江戸城談判とまで進んでしまへ  
ば、事はかへつて氣樂なのだ。

そんなことは知らぬから、世間では、高輪薩邸における、勝、西郷兩雄の會見を、古今の  
名劇として推稱し、當時における勝の畢生の苦心を談ずるものが多いが、實はあの時にはも  
う結論に近づいて居つたので、序論や中味は、チャンと出来あがつてしまつて居つたのだ。

官軍の中堅がまだ静岡に出ない前に勝は一書を薩藩士百川某といふのに托して參謀西郷  
の許につかはしてゐる。

その手紙の文面に、

「無偏無黨、王道蕩々たり。官軍逼鄙府といへ共、謹で恭順の禮を守るものは、我徳川  
氏の士民といへ共、皇國の一民なるを以ての故なると、皇國當今の形勢、昔時に異なり、  
兄弟牆に闘けども外其侮を禦ぐの時なるを知らばなり。雖然、鄙府四方八達、士民數  
萬來往して、不教の民、我主の意を解せず、或は此の大變に乗じて不羈を計るの徒、鎮撫  
盡力、餘力を遺さずといへ共、明日の變、誠に計難、殊に小臣鎮撫方、殆ど盡き、手を  
下すの道なく、空しく飛丸の下に憤死を決するのみ。雖然、後宮の尊位(和宮を指す)一  
朝此不測の變に至らば、頑民無頼の徒何等の大變牆内に可發哉と、日夜焦慮す。恭順の途  
從是破るといへ共、奈何せんその統御道なきことを。唯軍門參謀諸君、能くその情實を詳  
かにし、理其條を正さんと、且百年の公評とを以て、泉下に期するに在る而已。嗚呼痛し  
い哉。上下道隔る、皇國の存亡を以て心とする者少なく、小臣數して訴へざるを得處

なり。其御所置の如きは、敢て陳述するところにあらず。正ならば皇國の大幸、一點不正の擧あらば、皇國瓦解、亂民賊子の名、千載の打消する所なからん歟。小臣推參して其情實を哀訴せんとすれども、士民沸騰半日も去る能はず。唯愁苦して鎮撫す。果して勞するもその功なきを知る。然れども其志達せざるは天也。到於此、此際何ぞ疑を存せんや」

辰二日

勝安房

此の一文を讀んで見ても、勝の心中にある忠誠已みがたき熱情は、十分に推察することが出来る。

慶喜は勝を召して、官軍を途中に迎へ、自分の恭順の誠衷を通じて呉れよといふ話があり勝もその氣になつて、一馬鞭を打つて出かけようとしたが、勝なくしては、江戸市中がどんな事になるか分らぬといふので、たうとうその事は沙汰やみとなつた。

それによつても、勝の一身といふものが、全江戸市民の生死に關して居つたことがわかるのだ。何といつても、勝は幕末の英傑である。

### 七 江戸開城は歴史の花

西郷の肚は、どこまでも戦争をする腹であつた。何故といふに御一新といふやうな、國家の一大變革が、あまり氣安くトン／＼拍子で出來あがるのはよろしくない。運だめし力だめし、ウンと手ごたへがなくては、新日本の力が出來あがらぬといふのが西郷の心である。

そこでウンと勢ひ込んで京都を出ると、三條の橋かなんかでもうその決心を涙にかへる一事件に引つかゝつてしまつた。

見ると一人の美しい尼さんが、橋のもとに王師の堂々たる出陣を送つてゐるのだ。薩長の兵隊ども、一寸變な眼をして見てゐるもの、京都には尊ふとい女性が尼さんにおなりになつてゐるから、迂濶には叱りとばせないのだ。

する中に堂々たる王師は、錦の御旗を樹て、進んで行く。恰度參謀大西郷が通りかゝると思ふと件の一尼僧が、怯くする色もなく、つか／＼と西郷の前に出て来て、

「王師出陣のはなむけに……」

といつて一枚の短冊を渡すのだ。

西郷どんは不思議さうにその短冊を見ると、見事な筆蹟で、  
打つ人も打たる人も心せよ

おなじ御國のみ民ならずや

とすらくと清水の流るゝやうに認めてある。

西郷は「ハッ」と心のひさを打つて尼僧を見やると、ハタとその眼を見た尼さんは、  
「お分りですか……」

といつたやうな顔をして、いづくかへ立ち去つてしまつたのだ。この尼僧こそは誰れあらう  
當時浴中に其人ありと知られた太田垣蓮月尼であつたのだ。

そこで、西郷どんの心がしめつぼくなつてゐるところへ、勝が一生を捨てゝの哀訴狀が來  
る。

次には山岡鐵舟が、重團の官軍をつき抜けて、静岡まで一氣に飛んで來て、舊主慶喜の衷  
情を訴へるので、西郷どんの腹がうるほはない譯はないのだ。

いよく高輪で西郷と勝と向ひ合つて坐つた時に、西郷は刺客を脊にして舊主の爲めに大  
道を説く海舟の一身を打ちながめて、腹の中で「慶喜さんはよい家來を持たれたものぢや」  
と思つたことであらう。

開城の歴史は、悉く降伏の歴史である。史上にいろんな開城があるが、皆んな批難を殘さ  
ないものはないのだ。

日露戦争の時に、旅順を開城したステツセル將軍も、いよく乃木軍が進入して見ると、  
猶一ヶ月間は支へることの出来る彈藥糧食を持つてゐたことがわかつて、批難的に立つ  
たこともある。

勝の開城は、一戦もせずして西郷に降参してゐるのだが、後世誰れ一人、彼れを批難する  
ものはなく、批難しないばかりか、彼れの行動は萬人の推稱するところとなつてゐる。

こゝを考へなければならぬ。人間の行ひの中で、何が一番貴いかといへば、至誠の行ひほ  
ど貴いものはないのだ。

勝は策士だ。策士において決して他人に後れをとる人間ではない。その策士の勝さんが、誠

心を披瀝して西郷の前に兩手をついたのが、江戸百萬の市民の生命を助けたのである。策略ばかりでやつたことなら、勝さんの首は品川からの歸り道で、夙くに飛んでしまつてをつたに相違ないのだ。

### 八 英雄と英雄との對談

「昨年以來、上下公平一致の旨あれども、其中に私あり。遂に當日の變に及ぶものは、皇國人物乏しきに因る。就中伏見の一擧、一二の藩士を以て失錯あるは、我が最も恥る處堂々たる天下終に同胞相喰む。何ぞ其れ陋なるや。我輩忠諫一死を以て報すべきに、已に其失前日にあり。今日何の面目あつて口を開かんや。然りといへ共、不日にして一戰數萬の生靈を損ぜんとなす。其戰や名節條理正しきにあらざり。各私憤を包藏して丈夫の爲すべき所にあらず、吾人は是を知れども官軍猛勢を張り、白刃飛丸を以て漫に虚聲を假つて、怯弱の士民を劫さば、我も亦た兵を以て之に應ぜんには、無辜の死、益々多く、生靈之塗炭、益々甚しからん歟。軍門實に皇國に忠する志あらば、宜しく其條理と情實と

を詳かにして後一戰を試みよ。我輩も亦能く其正不正を顧み、敢て漫りに輕擧すべからず。嗚呼我主家滅亡に當つて、一の名節大條理を持し、從容死に就くものなきは、千載の遺憾にして、海外の一笑を招く而已。我輩是を知れども、力支ゆる能はず、共に魚肉せらるゝ者は、深怨銘肝、日夜焦死し、殆ど憤死せんとす。憐れ其心理を詳察あらば、軍門に臨んで一言を談せん。幸ひに熟考せられれば公私の大幸、死後猶生るが如くならん。謹言。

辰三月

勝 安芳

### 參謀軍門

この手紙は慶應四年の三月十三日、西郷が高輪の薩藩邸まで進んで、戦か和か、今一兩日にして江戸市中が火となるか否かの境に、勝が西郷に送つた書簡であつた。この血誠の現はれたる一書を手にした時、西郷は獨り打ちうなづきつゝ、勝の來邸を求めた。

いよく兩雄が對坐すると、先づ勝から口を開いて、一別以來の挨拶をした。西郷は勝をみながら、